明治二十六年四月五日發行

女鑑

第三十六號

東京國光社

一

女鑑第三十六號目次

鈴木宇右衛門の妻子



女鑑　第三十六號

女鑑

女子の五疾

貝原益軒、かつて女大學を著して、婦人實行の規範を示されぬ。その言剴切、道理と實際とに照らして、ますますその旨の深きを知るに足れり。而して之れを今の世に採り來りて、婦人の敎となすも、一に不可なるものなきが如し。然るに、世人動もすれば、彼の女今川、女小學、女大學等を以て、今の婦人をして、全く卑屈腐敗ならしめたるものなりとなすは、未だ深く察せざるものにして、又能く其れ等の書に就きて、潛志凝思せざるなり。中に女大學五疾のあげつらひの如きは、今日婦人の上に、益々適實なるを信ず。故に今その目を擧げて、聊論ずる所

あらんとす。

一　和順ならざる事
二　怒り恨む事
三　人を謗る事
四　物妬みする事
五　智惠の淺き事

以上五疾の內、智惠の淺き箇條は、他の四箇條の根本ともなるべきものにて、智惠淺き故に、嫉妬の念を生じ、人をも誹謗し、怒りもし、恨みもする事なり。凡て婦人は、目前の利害にのみかゝづらひて、遠慮深思なきものなり。故にわが情念、又は利得に關する事などある時には、眞如の月、忽ち曇りて、是非の明を失ひ、意

馬狂ひ、心猿走りて、容易に繋ぎとむること能はず。是に於いてか、怒るべからざるに怒り、恨むべからざるに恨み、謗るべからざるに謗り、妬むべからざるに妬み、又その原因根據を尋ね究むるに暇あらざるなり。而して男子の宏量遠識あると、大にその趣を異にせり。後醍醐天皇中興の議は、頼貞の妻によりて漏洩し義政の夫人富子は、應仁の乱を醸成せり。封建時代以後、諸國大名の御家騒動といへるものを、子細に分撿せば、その原因、多くは婦人に關せざるものなかるべし。而してその極は、婦人淺慮の致す所に歸すべきなり。彼の忠臣義士の、大事を擧げんとするに當り、深くその事を秘して、己が妻にだに告げずといへるものは、その縁属二世に繋がる親愛の情にも、目前の事に拘りて、動もすれば、大事を漏洩し、事を破る恐れあればなり。婦人淺慮の一疾は、そのかゝる所、實に

大にして、婦人の愼むべき最大一といふべき也。
下婢の井筒談と、妻婦の湯桁物語とは、同一對のものにて、その喃々、その喋々の内には、巧みに嫉妬、誹謗、怨恨、怒罵等の諸種をあらはして、婦人の本性を見るに足るべきものあり。唯彼等は、無教育にて、事理を解せざるが爲に然る者にて、敎育ある者には、井筒談はいふ迄もなく、湯桁物語のあるべしとも思はれざれども、婦人の本性を徴證すべき一の引例には、不適當とも思はれざるなり。實にかの井筒談、湯桁物語の聞き苦しきは、その喋々喃々にはあらで、その談話、常に人の上に亘りて、誹謗、怨恨、怒罵、嫉妬等、諸種の惡味を含有すればなり。是等の惡味は、既に婦女の不德にて、その不德の爲に、惡名を千歳に殘せるもの、歴史家乘に就きて捜索せば、數かぎりもなき事なり。而して此又、身を

破り、家を傷ひ、人を害し、國を失ふべきものにて、婦人の愼むべき要點なることは、論を俟たざるなり。

婦人の和順なるべきことゝは、吾人の屢唱ふる所にて、讀者既に、耳にも眼にも存する所ならん。故に今之を說かず。要するに、以上五疾は、婦人の當に愼むべき事の內、最大なるものにて、悉く皆、一身より一國に關係する事なれば、深く察せざるべからざる也。當今新敎育を受け、洋化主義を執れる婦人、即從來の女敎は、文明の婦人に適せずとなす婦人を見るに、果して和順にして、怨恨、怒罵、嫉妬、誹謗の不德はなきか。又果して智慮深遠にして、目前の利得に拘々たる者なきか。大に惑なきこと能はざる也。吾人は、今日の婦人の、此等惡德の增長、益々巧になりゆきて、平話茶談も、彼の井筒、湯桁の兩物語と匹敵せんことを見

て、敢て其の他を見ざる也。會其の他に於いて見聞する所は、婦人交際の進歩と、口説の發達と、時々醜聲の漏洩と位に過ぎざる也。今の婦人は、恰瓦石を包むに、錦繍もてせるが如く、外觀甚美なるが如しと雖も、開き見れば、半文の價なし。嗚呼、誰れか舊來の女敎を、悉く非なりと云ふものぞ。

論説

琴、活花の精神を學ぶべし

土子金四郎

己れ曩に、女鑑紙上に、茶道の和、敬、清、寂を示し、女子の茶を學ぶものは、よろしく此の四つの意を、心に修め、たゞ点茶の手前のみをならふべきものにあらずと説きたりしが、茶の事のみならず、總べて物は、よく其の精神を味ひて、

之を己が身の上などにも引き合はして考ふべし。上づらのみを見ては、おもしろからぬ事も、深く究むる時は、大に味の出づるものなり。此の頃、女子の學校には、茶事と共に、琴、活花なども行はれ、女子には、適當の事とて、學ぶものも少からざれども、をしふる人も、習ふ人も、多くは音の妙に、曲の巧ならん事のみをつとめ、枝ぶりの器用に、花の美しからん事のみに心を用ひ、聞くと見るとの樂しみに過ぎざるものゝ様におもふものゝ如し。己れおもへらく、琴や活花や、上部のみを見れば、耳と目とを樂しましむるに過ぎざるべけれども、よく其の精神を味へば、共に世の中の大法を示し、人の人たる道、女子の女子たる所以をあらはすもの也。女子の琴、活花を學ぶもの、此に心をつけなば、豈にたゞ、耳と目とを樂しましむるにとゞまらん。そを何ぞといはゞ、調和の二字也。夫れ

宇宙は、太陽を中にして、幾萬の星、之を圍み、我等が現世と稱ふる、此の地球も、亦その星の一にして、是等の星、みな互に引力を有し、各其所を得て調和するが故に、宇宙の破壞を來さゞる也。若し調和を失はゞ、或は此の地球も、いたく太陽に引かれて、打ちくづれんも知るべからず。又我が日の本も、畏けれど、上、萬世一系の君をいたゞき、下、士農工商、皆其の業に就き、社會の秩序、調和すればこそ、吾も人も、枕を高うして寐らるゝものなれ。一朝此の秩序を乱さんか。國民塗炭の間に苦しむ事あらん。次に又、人の此の世に在るや、男女の兩性ありて、男は剛、女は柔、陽と陰と、互に相調和して、初めて和合樂を得る也。然るを女子にして、其の本分を乱し、さかしら立ちて、男子の領分にまで立入らば、是れ調和を失ふものにして、末終に、いふべからざる不幸を釀さん。之を思へば、

世の中に、調和ほど大切の事はあらじ。今琴の音の、琉璃盤上に玉を轉がすがとあやしまる丶は、畢竟、よく五音十二律の調和すれば也。又活花の風姿、人をして恍惚たらしむるものは、天地人のくばり、根締の調和すれば也。未だ音律の調はずして、琴の妙なるを聞かず。天地人根締の調はずして、活花の美なるを見ず。已れもとより、琴、活花の事に明かならずといへども、察するに、調和の二字を以て、其の精神となすものならん。されば、之を學ぶ女子は、此の精神のある所を、己が身に引き合はし、父母、良人、姉妹、朋友に接する道は更なり、常々のたちゐふるまひ、物のいひざまで、女子たる本分を乱し、調はざるふしもあらんかと、朝夕に心を用ふべし。古の君子は、三度吾が身を省みたりとかや。君子まして然り。並々の女子は、五度も六度も省みて可なり。琴を彈ずる事巧にして、

其の座り樣乱れ、花を活けること器用にして、其の歩行き方あらくしきなど、此の頃往々見かくる事あり。琴に對し、花に對して、耻かしき事にあらずや。物を學ばんには、其の上部のみを學ぶべからず。よろしく其の精神を學ぶべし。

女子四期の心得（承前）

大林弘一郎

(三)妻道

妻道(即第三期)とは何ぞ。即ち嫁して人の妻となるの道なり。固より婦道との差なきが如し。然れども、自ら異なきを能はず何となれば、婦と言へば、舅姑よりして云ふ言辞なれば、舅姑に對する上に就て、關係至つて重し。故に舅姑ある間は、幾十年の久しきを經るとも、婦順の心得を、片時も忘遺すべからず。且又

生ては事つるに禮を以てし、死しては祭つるに禮を以てす。と經文にも見えたれば、其歿後たりとも、決して禮敬を怠るべきにあらざる也。さて妻道の要たる所は、即ち專ら貞靜淑順にして、能く其夫を敬し、一に已れの身を委ねて、終始其指揮を奉じ、其命に從ひて、以て家を齊ふるの務に服從するにあり。必ず我小智を恃み、其良人を踈んじ、以て自得するが如き不敬なる所爲あるべからず。若し此の如くなれば、則ち嫁しては夫に從ふと云ふ經文に悖るものにして、則ち夫婦の和を合せ全うすること能はず、畏くも聖勅の、夫婦相和しとの御趣旨にも違背するものなれば、尤も恐れ愼むべきの至なり。凡て人の男女ある所以のものは、固より深理あるものならん。天獨り高くして地なきときは、以て物を生ずるとなし。必ず地を待て、以て物を生育する也。人亦是の如きのみ。故に男は陽に

して壯なれども、女の之を補助贊成するヿなければ、以て事を成すヿなき也。故に傳にも、男女室に居るは、人の大倫なり。又君子の道は、端を夫婦に造すなどの語あり。且妻の言たるや齊なり。必ず其夫と心を同うし、体を齊うして終始渝はらず。たとひ万苦千難に遇ふとも、益々其節操を正しうし、夫と死生進退を共にするヿ、尤肝要なり。而其平居無事なるときは、常に家政を斡旋し、織縫中饋の常務より、祖先の祭祀、賓客の饗饋等に至るまで、已れ自ら之に任じ、良人をして、内を顧みずして、專ら外事を勤めしむるを以て本分となすべし。古に曰く、男は位を外に正し、女は位を内に正うす。男女正しきは、天地の大義なりと。是によりて、男女各其務あり。内外自ら其別あるを知るべし。必ず已れの分限を踰えて、妄りに言を出し、外事に關かるべからず。然れども、外事は少しも知らず

して可なりと云ふにあらず。夫人外事を知らざるときは、若し其夫の過失あり、或は禍害に逢ふの際にあたりて、唯狼狽して爲す所を知らず。悲痛して救濟すること能はざることあらん。是亦無術の至ならずや。然らば、僅に家事を辨ぜば足れりとして、自ら安んずべきにあらず。若し夫をして非命に死し、又は耻辱を蒙むるの變あらしめば、獨り其夫の耻のみに止らずして、妻たるもの、亦人口に上り、評論を受くるや必せり。豈に勤めざるべけんや。且又義理を明に辨へ置くこと、極めて重要なり。婦人義理に暗きは、天下の通憾なれば、最も深く注意せざるべからず。若し理に暗く、義に通ぜざるときは、事の善惡是非を明に知るべからず。是非善惡明かならざるときは、たとひ夫の爲す所、道に違ひ理に悖ることありとも、之を辨別すること能はざれば、之を諫めて善ならしめ、之を曉して道に從はしむ

ること能はず。知らず識らず、極惡大罪に陷らしむることあらん。是尤も深戒勵精せざるべからざる所にあらずや。近時女子の風、大に壞亂し、唯西蠻の俗のみを崇ぶの餘、遂に內外尊卑の禮を亂し、所謂自由結婚などの醜俗に倣ひ、男女別あるの教を廢し、夫婦の間、自和合せず、男女同權の妄說も是より起り、婦女子の輕薄なるものは、頻りに之を唱和し、外は海外諸邦の學を玩び、或は耳を政治に傾け、或は目を法律に注ぎ、而して其本分たる內政、家事の本務に於ては、漠然として知ることなく、妄に男子の權限を犯して、却て已の務むる所を失ふもの多し。女位を內に正すの美德、果して何にあるや。宜なる哉、閨門修まらずして、世人の嘲笑を蒙むることや。婦人女子たるもの、豈に懼れ愼まざるべけんや。是れ予が妻道に於て、特に痛論する所以なり。

（未完）

女子要言　第二篇(八)

三輪田眞佐子

第二、母たる道。　一國の盛衰は、其の國民の賢愚に由り、其の國民の賢愚は、其の母に由るは、古人の、賢母あり、然る後賢子孫あり。と云ふを見るも明かなり。人誰れか、國威の、宇内に輝々たるを欲せざらん。龜巖上に遊ぶの泰平を願はざらん。從うて、母たるものゝ道を講ずるの必要を知らざるものはなかるべし。

蓋し智德發達の時期は、主として幼年の時なり。而して其の根源は、一　本能、二　實歷、三　教授等にあり。今其の次第を、少しく詳かにせん。

本能力とは、天然生まれながら、得有するものにして、而して生存に欠くべからざる智識なり。即ち人は、萬物の靈たれば、毫も教へずとも、身の饑渴を禦ぎ、

寒暑を避くるに類する智識は、自然に存するものなり。若本能善良なれば、賢人となり、君子となり、以て幸祉を得べし。邪悪なれば、移らざる下愚となり、糞土の墻に等しきものとなり、以て不運と云ふべし。然り而して、其の本能の優劣は、主として母の遺傳に基くものなり。故に人の母たるもの、邪行、怠惰、放恣の悪習あれば、其の子、必ず賢達なることを得ず。彼の列女傳に、古者婦人妊子、寢不側、坐不邊、立不蹕、不食邪味、割不正不食、席不正不坐、目不見邪色、耳不聽淫聲、夜則令瞽誦詩道正事、如此則生子形容端正、才過人矣、と實に母の操行は、生まるゝ子と關係あるは、掩ふべからざる事實なり。文王の母太任、王を妊むに及びて、目悪色を見ず、耳淫聲を聽かず、口敖言を出ださずと。宜なる哉、聖明の子あるや。而して此の理は、恐らくは天下の女子知らざるはなし。然れども、

亦實行する女子は少かるべし。果して然らば、知りて行はさるは、尚知らさるに等し。吾は天下の諸孃に、眞理の實踐を祈るなり。或る妊婦は、衣帶を乱し、橙柚積で山をなし、卑猥の小說を枕となすあり。斯の如くにして、力山を拔き、氣世を蓋ふ傑士を産み、秀美明月の如く、廉潔雪の如き賢女を擧げんとす。難いかな。花を見て、花を羨むなかれ。本なき梢に花は咲かじ。

實歷に由りて得る智識とは、雪に觸れて、其の冷き物たるを知り、火に接して、熱き物たるを悟る如く、逐一實試して、歲月と共に得るものにして、人の知能の大小は、殆ど自ら實試するの多寡に比例するものなり。孔夫子の、農の事は、老農に問へと曰ふも、彼は實歷を以て、多くの智能を有するを云ふなり。然して、唯に斯の如く、實試に由りて、有要なる智識を得るのみならず、其の圍繞する事

情より、莫大の感化を受け、或は善人となり、惡人となる。而して殊に、其の感化を主とするものは、幼時の母なり。彼の孟母の三遷の敎、以て孟子をして、粗豆の感化を受けしめ、遂に聖賢の域に進達せしも、其の母、上述の理を知りて、應用せしに由るや、疑を容れず。左れは母たるものは、其の子と、其の身外事物の關係を明かにして、子を育つるにあらされは、決して賢子孫を得る能はず。「ウエスト」曰はく、吾が母の接吻、我をして畫工とならしめたりと。亦以て母のなせる瑣少の事にても、兒子后來、福運の基となる、斯の如し。「フヲウエル、バックストン」、嘗て其の母に書を贈りて曰はく、吾が他人の爲、心力を盡くして辟せさることとは、母君平生の持論定見、吾が幼時の心中に、種子を播きたるもの、現はれ出づる効驗なりと。此等は、皆男子は、其の母の人となり、及び育て方に從

うて、感化されたること、大なるを知るに足る。是を以て、小兒には、遊具を撰らばずんばあるべからざるは勿論、繪畫を示すにも、忠臣義士の事跡を以てすべし。世、妓娼の肖像を、愛子に與ふるものあるは、何の意ぞや。語るにも、節儉德義等を以てすべし。世、怪物、及び姦智等の妄談を以てするものあるは、何の意ぞや。亦教訓にて、人の性質、及び觀念の變更するは、恰も素糸の、或は黃、或は紫と染まるが如し。殊に先入主となるの道理あれば、幼時に於ける母の戒誨は、頗る大切なり。正行の義軍を興し、朝敵を打ち、大に南軍を勇奮せしめたるものは、誰れの力ぞや。彼れ父の死を聞き、己れも亦自害せんとする時、其の母の、栴檀は二葉より香し、汝幼きも、正成の子なり。而して父の、汝を此の世に存せしむるは、恩愛の爲にあらず。全く我が家の再興を計り、以て　主上の宸襟

を安じ奉らしめん爲と。泫然たる紅涙、彼を感動せしめたるにあらざるはなし。聞く、昔「スパルタ」婦人が、其の子等を軍營に送るや、曰はく、楯を杖いて歸れ、然らずは、楯に載りて歸れと。其の勇壯慷慨の奬勵によりてか、遂に「キリイキ」國を厭倒したりと。其の他、母の敎訓に仍りて、身を立て名を顯はしたる時賴の如く、「ワシントン」の如きもの、枚擧に遑あらず。

史談

鈴木宇右衛門の妻

小野改 田島利三郎

天明八年、春のはじめより夏かけて、雨風その折を得ざりしかど、秋に至りても、とりいるべき實少く、如何はせむと思ふまに、山風も吹き暴るゝころになりたれど、日日の食物だに求めかねたるを、ましてこれなど防がむやうもなく、天の下の人々は、

皆草木と共にしをれけり。かゝる中にも、陸奥地方は殊に甚しく、飢にせめられ、路傍ようつぶしたるが、そのまゝ死ぬるなど、あはれなること、目もあてられず。やう〳〵歩まるゝものは、ところ〴〵に散りゆきて、食を求めけり。

そのころ、出羽國庄内の鶴ヶ岡に、鈴木宇右衛門といふものありけり。もとは、小走役といふ卑しきつとめをせしものありしが、その妻某と、いろ〳〵の困難を凌ぎ、他人には吝嗇者よと嘲けらるゝばかりに節儉し、漸くにして、數段の田地を購ひ、家財なども、一わたり持たる身となりたれど、今はそのつとめを辭して、專らその田を耕しけり。

當年の凶事、この國には、さしも慘はしき害はなかりしかども、陸奥の方より、さまよひ來る慘はしげなる人々は、日々ひきもきらぬほどなり。されば、この國の人人は、皆その分に應せて、之をいたはり惠みけり。中にも、宇右衛門夫婦のものは、いたく憐に思ひ、及ぶかぎり、救恤せむと、先づ家財を賣り、ついで田地を賣り、賣らるべきは、皆賣りつくし、今は唯、二襲の衣服と、少しばかりの髮の具とのみ殘れり。一日妻は、これをも賣りて、救恤の資に充てむといひければ、宇右衛門は、『そ

はいと愛でたき心ながら、女の最も愛しむものは衣服なり。されバ、この二襲の衣服ばかりは、かく殘しおきつるなり。それはおきても、女は男と違ひ、外に行かむにも、一襲の着替だになからむ、いかにわびしく恥かしからむ。こればかりはおきね』と強ひてとゞめつ。妻は、『いはるゝことバは、然ることながら、人は皆、死なむばかりに苦しめる中に、衣服着かへ、外に出づるなど、中々に、物うく恥かしきことあり。されば、衣服などあればこそ、外へなど、ふとは思ひいづれ。なきかた心やすかるべし。今この衣服を賣れど、櫛簪など、既に要なし。これをも賣らば、まだ數人を救はるべし』と、遂に賣りて、皆恵みき。その年もくれて、時節ばかりは春となりたれど、いよ〳〵人々を凍ゑしむのみなり。一日、身体を雪にてつゝみたる十一二歳の女兒、宇右衛門の門邊に來りて、食をと乞ふ。その雪をはらふ勢もあげに、衰弱へたり。

宇右衛門夫婦の間に、十二歳になれる娘あり。妻はその娘をよびて、『門の外を見よ。この寒さに。年など其許と同じ程ならむかし。彼の父母は、いかにせしにか。あはれ。其許は、今綿入れたる衣、二ツ重ね着たり。一つ脱きて與へよ』といひけれど、娘

は、つと立ちて、上着を脱ぎ、「母様がいはれつる。これ着てよ。火近くよりて、少し温りてゆきね」と懇にいたはり、わが衣服を着せて歸しゝといふ。かく、他人を救恤するために、嘗て人に嘲けられながら、得たる田地家財を惜しげもなくすて、はては、最愛の娘のものさへ、餘りなきまで、惠み盡したるは、實にありがたきこゝろなりけり。

今の世の人の中には、一年千五百圓の俸給うくる身にて、十年の後には、拾五萬圓の資産をつくるものあり。人よりも、いみじう奢侈しながら。これらは、大方ろの妻たるもの、臺所の方より出で入るものより、少しの困難もせずて、得つるものなりといへり。それだに慈善などに散らすを厭ふ。まして夫をせめて、奪ひとりし指環簪などの類は、思ひもかけぬことなり。諸孃の知り人に、若しさる人もあらば、この傳を、日に三度ばかりは、必ず誦めとすゝめ給ひね。總べて困難せずよ、資産得むとおもふは、いみじき曲事なり。

孝女たけが事

片岡正占

たけは、豊後國國東郡來浦村の百姓、長左衛門が娘なり、十一の年、父病にそみて、筋骨傷み、ありく事も叶はざりしが、日を經て痛み甚だしく、十餘年起臥ならざるを、至らぬことなく介抱し、夜更れど母と弟とはふさせ、おのれは終夜附居れど、父いたく悦びて、食事を始め、よろづたけにまかせけり、生れつき氣短かなるに、年久しき病にさへ倦て、たけを仕ふにも、むくつけく罵りけれど、露ばかりも逆はず、彌々懇に扱ひければ、父が心も和らぎけり、麵類など喰はんと云へど、母と共々調とて奨め、又甘酒を好めど、常に貯へ置てすゝめしに、父も後には心をおきて、呑んとも云はざりしを、父の心を量りて、貰ひ置きたる錢をもて麴を買ひ、密に造りてすゝめしとぞ、十七の時、父の病ことに重りしかど、其村の氏神なる牛頭天王に、一七日の斷食して通夜しけり、祖父も親も、たけが身をあんじ、三日四日も立ぬる頃、隣に有りける伯母を頼みて、滿願も同じければ、とく家にかへるべしなど、様々に云はせけるに、思ひ立たる事なれどとて、耳にもかけず、一七日を滿しけり、父は其しるしにや、病も少し怠りければ、牛頭天王を尊とく思ひ、垢離をとり一里に餘れる道を、百日詣せしとなん、即て村の役つとむる者訴へしかば、天明五年四

月に、領主より錢を與へて賞しけり、
編者おもへらく、孝子は貧家下賤の者に多しと、古來より云ひ傳へたり、富み上流社會の子等は、いかに思ひ給ふや、吾古語に、神習青人草習はめやと云ふ事あり、神習ふとは、神のをしへを從ひ守りて、親に孝を竭し、夫に貞節に仕へ、一家の内政をよく治め、中にも君に仕奉る姫等は、忠義正しく、身をも心をも竭して、御爲をはかれよと云ふ意なり、青人草習はめやとは、謂ゆる不孝、不義、不貞、不忠なる振舞を爲す人の心に、な習ひそと云ふ意なり、たとへ、身は下賤の者の腹より出し者にても、心を神にして、神の行ひをする人は、神習ふなり、富家上流社會の人の子と生れても、不孝、不義、不貞、不忠なる心の人は、青人草習ふ者ぞと云ふ意なり、此所に引て申すは恐けれど、既に
皇后陛下の御歌にも、もつ人の心によりて寶とも仇ともなるは黄金なりけり」と詠せ給へるは、人の心の用法を示し給へるなり、神習へは、よき子寶なりと、神も皇も親もよろこび給ふなり、青人草習ふ心の人は、神皇親の仇となりて、謂ゆる人面獸心と、人も嘲笑ふが故に、人は男女を問はず、心の用法肝要なり、との

意なりかし、

家政

看護法捷徑（十三）

三笠舍主人

十六　病者咳嗽及嘔吐

一 咳嗽に二種あり、喉頭、氣道、又は肺臟より生ずる排泄物、則、痰を略出するものを、濕咳と言ひ、排泄物なくして、只咳のみ與るものを、乾咳と云ふ、病により て違ひあり、通常濕咳を多しとす、

二 尋常の咳嗽は、看護を要する事少きも、略痰困難なる時、若くは衰弱したる病者咳を發する時は、看護者は、一手にて病者の前額を支へ、他手に唾壺を抱りて、口の前に保つべし、若し咳嗽頻發する時は、枕を高くして、半臥の位置を取らしむるを良とす、

三 痰は必ず略出せしむべし、嚥下爲さしむべからず、又必ず唾壺に貯へ、密に蓋を

閉ぢ置て、醫士來診の節、檢査を受くべし、其他、咳嗽の强弱多少等、凡て落なく醫士に報告すべし、

若し痰の中に、血を混ずる事あらむ、特に注意して、其咯出する時の模樣、幷に血液鮮紅にして泡沫を含み、流動するや、或は其色暗赤にして、多少凝結するや、等を調べ置くべし、(肺臟其他氣道より出たるものは、鮮紅にして泡を含み流動す、胃部より出たるものは、暗赤色にして、多少凝固狀を爲す)

四 胃の內容物、(食したるもの、幷に胃內の分泌物)或は腸の中に在るもの、(膽汁、其他の內容物、病に依りて、糞汁を吐するもの有)逆流して、口より出るを、嘔吐と言ふ、但、同時に多少氣道の分泌物をも混ず、

五 病者嘔吐を催す時は、速に衣帶を寬解し、看護者一手を病者の前額に、他手を後頭に當て、頭首を固持して其低垂を支へ、(頭首低垂する時は、吐物鼻中に入る)大なる受器を口前に把りて、十分に吐出せしむべし、

六 病症によりては、吐劑を與へて、特更に嘔吐爲しむる事有、吐劑は空腹の時に與ふるを法とす、之を與へて後、更に微溫湯、若くは稀薄なる肉羹汁少許を與ふる

時は、嘔吐多くは容易なり、但、努めて吐出を忍ばしめ、遂に耐へ難きに至りて、一頓に吐出せしむべし、此く爲す時は、容易にして充分に吐出し、窒息狀の苦悶少し、

七 沈醉、若くは卒倒、等の人事不省中に、嘔吐を催す時は、特に注意して、必ず頭首を横に固持して、吐出せしむべし、然爲されば、吐物氣道の中に入りて、窒息を與すの恐れあり、

八 嘔吐持續して止まざる時は、酸味の飲料(リモナーデ等)、炭酸水、氷片、若くは冷水、若くは少量の咖啡、(砂糖を加ふべからず、)等を與ふべし、猶止まざる時は、醫士に報告して、所置を請ふべし、

九 嘔吐鎭靜するに至れば、毎回淸水にて、充分に口内を嗽がしむべし、

十 吐出物は、其性狀、色樣混合物等を撿査して、醫士來診の節、一々報告すべし、疑あるものは、貯へ置て、醫士に撿査を受くべし、

吐出物を受たる器は、速に室外に出して、掃除すべし、若醫士の撿査を要する時は、密に蓋して、厠の側らに貯ふべし、

十一傳染病者の吐物、幷に喀痰は、十分の消毒を行ふ、其方法は、醫士の命に依るべし、

十二總て嘔吐を催す病者の室內は、煖に過るは惡しく、華氏の六十三四度、乃至六十七八度に保つを良とす、

料理法（十六）　待月菴

煮蜀椒の方

一粒山椒壹舛、味噌五合(但擂て)、醤油壹升、右三品、鍋にてあげ、火いろみていり、入置候事、

煮大豆の方

一黑豆よく洗ひ、四五日日にほし、醤油ひた〳〵に入、炭火にて、そろ〳〵と煮、たび〳〵杓子にてまぜ、大かた煮たる時、太白を入、またよく煮置ば、久しく持なり、尤堅過れば、和かなる仕方は、一日前に、ざつと煮、翌日も又よく〳〵煮て、のちに砂糖醤油を入るなり、

いろりの仕様

一法輪味噌一升、昆布二枚、味噌一合、串柿十、醬油少々、右せんじ、濾過て糟を捨候事、

麥飯仕樣

一麥しろく搗、夕刻用うる時は、朝より水に漬、鍋に水をひた〳〵よりは多く入煮、水へり候へバ、さし水いたし、能煮たる時、ぬる湯にても水にても、ねむり取れ候まで洗打揚、雫をたらし、鍋にて、かわくまで、いり上候事、

山芋の仕樣

一山芋布巾にて卷、皮をむき、酒しほに漬置、煮れど何程煮ても、くだけぬものなり、

はんせい麩の方

一酒よく煮、麩を入 また能煮、麩のとけたる時、布に包入、煮湯へ入、ゆにをすれば、かたまりて再び麩になる、これを酢みそなどにて用てよし、

〇麵類の事

蕎麥切方

一上々そば粉をこね、にえゆを少し落し、たら〳〵よこね、又水にてよくこね、常のごとく打てゆで、清水にてざつと洗上、湯を桶に入、其上にざるを置、そバを入、上より沸湯をかけ候へバ、下の湯気にて蒸ゆえ、ぬめりとれ、かわき候なり、

同方

一蕎麦粉ねり、玉に丸め、厚さ五歩位、平目にして、打粉に小ぬかをふるひ、つかひ候へバ、手に就不申、湯煮する時、右の打粉、湯の中に流れ、ねたり不申候、打粉に、小ぬかをふるひ候事、秘伝なり、

そバゆでゝ久敷置事

一ゆで候時、其中に水一荷程に、白砂糖少し、くるみ五ッほど入、常の如くゆで、ぬる湯にて洗、笊に上げ、ものに入置バ、すこしも損ずる事なし、

饂飩の事

一うどん粉、常の如くこね、春秋は塩一盃、水四盃、夏は塩一杯、水三杯、冬は、塩一杯、水五杯入、杉原紙の厚さ位のべ、細く切、ざつとゆで、浮上ると其儘取上、なまぬるの湯にてよく洗、のちに煮湯をかけて遣候事、

切麥の方

一右同樣にいたし、冷し候分は、隨分細かに切候事、

麥切の方

一むぎよくつき、粉にいたし、よくふるひ、水にてこね候事、

葛切の方

一葛を粉にして、よくふるひ、にえゆにてこね、打延べ、ほそく切、ふり粉にも、葛粉を遣ひ、煮すぎ不申やう取上、水に入、二三度替、切麥の如く冷して出す、またあたゝめて出すには、湯をさす事

紅粉切の方

一大唐米、しほ水を打、中白に搗、細かにふるひ、山の芋をおろしにて擂、よきかげんにてこね、その如くゆでゝ用ゐ候事、

薯蕷麪の方

一粳米上白をはたき、粉にしてよくふるひ、山の芋、皮を去りすりて、右の粉和らかにてこね、鍋に湯を立、しほを入、かきまはし、右のこねたる粉を入、浮上る節

を煮て、其儘取上、水に入、三べんほどかへて洗、また湯にあたゝめ、鍋にふたをせずしてゆで候事、

葛麪の方

一水三合ほどの中に、葛を盃に半分位入、よく解、なべに入、炭火にてそろ〳〵煮、葛の色替りたるを冷し置、これをこね、汁につかひ、長くつゝき候位にこね、椀の底に穴を四ッ五ッ明け、鍋に湯をよく煮立、其中に流し込、油断なく火を焚、湯氣つよくいたし、右ながし入たるを、せん操に取上、水に入、煮砂糖にても、だしにてもよし、

たまご素麪の方

一鷄卵五十、あひかも五つ、右白身をとり、黄身ばかり、木綿にてこし、能交、白砂糖四斤に、水二升を交合、玉子十五のしろみばかりにてせんじ、篩にてこし、猶又せんじ、煮立泡立とき、玉子のからに穴を明け落し、すくひ上、砂糖の汁をしぼり候事、但抄子に水二杯ほど入、上るなり、

水せんの方

一葛粉一盃、右ねり合、煮たる湯に、右の葛、かな杓子にてすくひ、水せんヒ、鍋に入、水におろし候なり、但くちなしなど入てもよし、

カステイラの法追加

一鷄卵、しろみ、黄味をわけて三十、砂糖二百目、これをよく擂、玉子のきみを少しづゝ入、追々にすり、うどんの粉、極上百目入、またよくすり、白みを茶筌にてあわだゝせ、半分入る、燒鍋に紙をしき、油をひき、凡鍋の半分位、粉を入て燒なり、但し火は、たどん四ッを、よく火にして底に入、蓋の上にも火を置べし、

庖厨のこゝろ得

○炭火を熾にせんと欲せば、塩を一匙うち込べし、

○腸詰の肉には、生姜をすこし加ふれバ、味をよくするなり、

○ソップを製するには、初より冷水にて焚ば、よく肉汁をよび出すなり、

○肉を食せんとは、熱湯に入て煮るがよし、

以上世間流料理法終

學園

文學小傳（承前）

難波津淺香

一條兼良公

公は左大臣從一位關白經嗣公の第二子なり、兄の經輔卿病身にて出家せられけれど、公兄に代りて家を嗣がれき、かくて官位累りに進み、左大臣從一位に昇り、後には太政大臣にも至り、攝政と爲り、又關白にも補せられたる二度に及べり、其二度目關白に補せられし年は應永元年にて、かの有名なる應仁の亂、即ち山名宗全と細川勝元と數萬の軍兵を聚めて、十一ヶ年の間、京都に合戰しける、其始まりなりき、されど公の一條(地名)の屋敷、其合戰の爲に燒拂はれて、數代の遺跡も皆一時の烟となり、代々傳へられし寶物も盡く灰となりて失せぬ、只文庫のみは土藏造りなりしかど、火には燒けざりしかど、是も打ち破られてけり、其文庫の中には祖先より受け傳へられたる書籍、又自ら集められけるもありて、七百餘箱に入れて藏めおかれしを、よき財やあらん、金や無きと思ひて、兵士どもかきさがすとて引き散らしけ

れど、數萬卷の書籍、數町の間に捨てられしとぞ、其他の事准へて知るべし、亂世の有樣げにさぞ有りけん、あさましといふも愚なり、

されバ公はからく家を逃れ出でゝ、九條(地名)に暫し止まりしかど、日々に戰爭劇しくして其處にも止まりかね、遠く奈良に赴きてある寺の內に宿りて世の靜まるを待たれき、かくて其合戰も止みて再び都に還り、文明十三年の四月二日といふに年八十にてぞかくれ給ひける、諡を後成恩寺殿と申す、世には一條の禪閤とも申すなり、

兼良公はかゝる亂世に生れあはせられしかど、さすがに攝家にて位は大臣をも極むるほどありて、又生れながら才識の秀れておはしけれど、若きよりかの數多の書どもを讀み明らめて、和漢の故事朝廷の禮儀等をよく知られけると其世にならぶ人なかりしとぞ、殊に和歌を善くし、連歌にも達せられけり、かの亂より以前に新玉集とて連歌の集二十卷を撰むれしが、是れも打ち散らされて跡をとゞめずとぞ、其他公事根元、文明一統記、樵談治要、東齋隨筆、花鳥餘情、代始和抄、源語秘訣、歌林良材、連珠合璧集、雲井の春などは幸に今に傳はれり、公事根元は最も有名の書にて朝廷の年中の儀式を記しゝもの、代始和抄には天子即位の儀式等を記し、文明

一統記、樵談治要には將軍義尚公の爲に政治上の意見を述べ、花鳥餘情、源語秘訣は源氏物語の註釋、歌林良材は歌書、連珠合璧集は連歌の書、雲井の春は蹴鞠のとを書き、東齋隨筆には種々の話を記せり、又藤河記とて、美濃國へ赴かれしときの記行あり、冬良公も學才ありて、增鏡、世諺問答など著はされたり、世の間は乱れて明暮合戰に暇なかりしときにも、かゝるいみじき人もありけるかなど、今幸に太平の時に生れしにつきても、其上の思ひやられて、且はあはれに、且はよろこびしくなん、みるひといかゞあらん、

女服考（第十四稿）

有住齋

男女服、古今の沿革あり、女の衣裳に、古へ袿といへるは、下の服にて、袿の上に、古表着を着たり、後代は、唐衣に代りて、小袿着たるが、近代は、禮服となれり、古代の裝ひは、四季にかはり、人々の心々なりしも、中古より、凡着る數さだまりて、順序おごそうになれり、此差別をたゞさずして、古今を誤る畵工多し、古代の着樣は、袿きぬとも云ふを着て、其上に單、其上に打衣、とりかさね

て、表着を着し、帶をし、袴を着し、腰結ひて、唐衣を着て、裳を付けたり、其うち唐衣には、禁色の色目あり、色ゆるされたる、上﨟の女房は、青色、赤色の唐衣に、地すりの裳、うはぎおしわたして、蘇芳などの織物なり、色ゆるされぬ女房にも、織物のから衣、うはぎ着る事もあり、常はりうもんのねび色の唐衣、龍文ならず、ねりぬき常の事なり、紋も古へはさだまる事なし、衣には其名にしたがひて、文を用ゐらる、松重には、松の摸様、藤重には、藤の摸様の類也、前に云ふ、袿と、小袿とは別なり、小袿には、唐衣重ぬる事なし、後世物の具着様は、先小袖白を着て、はり袴（引板）を着し、次に單、次に五ッ衣（單を下にして、一つにさぢ合、）次に唐衣（或は小袿きる事あ）り、次に裳をつけたり、又内々はきぬの上に、裳、唐衣着る例もありとみえたり、

但小袖を着初めしは、永觀以來にて、古今着様の沿革せしなり、

古の衣裝、かさね様、四季にかはる事、

○皆紅のきぬ、くれなゐの單、白き表着、松重の小うちき、

○紅にほひの衣、（うへくれなゐに、濃紅なかさね、）紅梅の單、もゑぎの表着、赤色の小袿、

○紅のうすやう、（上紅に、白きぬなかさね、）白きひとへ、さくらの表着、えびぞめの小袿、

○紫にほひ、（うへ紫に、薄紫をかさね、）くれなゐの單、うら山吹の表着、萌黄の小うちき、

○紫のうすやう、（うへ紫に、白きを重、）紅のひとへ、もえぎのうはぎ、紅梅の小うちき、

○梅のきぬ、（おもて白、うらすはう、）すはうのひとへ、紅梅のうはぎ、赤色の小うちき、

○つぼみ紅梅、（おもて紅梅、うらすはう、）青きひとへ、もえぎの表着、えびぞめの小うちき、

○裏まさりの紅梅、（おもて紅梅、うらくれなゐ、）まさりたる單、もえぎの表着、赤色の小うちき、

○こうちいかさね、くれなゐのひとへ、えび染のうはぎ、もえぎの小うちき、

○紅梅にほひ、（うへ紅梅に、薄紅梅を重、）まさりたる單　もえぎの表着、えびそめの小うちき、

○やなぎ、（おもて白、うら青、）くれなゐのひとへ、櫻もえぎの表着、赤色の小うちき、

○さくらがさね、（おもて白、うら赤花、）くれなゐの單、紅梅のうはぎ、すはうの小うちき、

○やまぶき匂ひ、（山吹の衣に、黄衣を重、）あをき單、もえぎのうはぎ、えび染の小うちき、

○花山吹、（おもて薄朽葉、うら黄いろ、）くれなゐの單、うら山吹の表着、青き小うちき、

○裏山吹、（おもて紅、うら黄色、）あをきひとへ、魚陵のうはぎ、えびぞめの小うちき、

○紅つゝじ、（おもてすはう、うらくれなゐ、）青きひとへ、松がさねのうはぎ、山吹の小うちき、

○すゝじ、（表すはう、うらあをし、）

○藤がさね、おもて紫、うら青し、くれなゐのひとへ、裏山吹のうはぎ、松重ねの小うちき、
○色々五、薄色、すはう、紅梅、もえぎ、山ぶき、くれなゐの單、紅梅のうはぎ、もえぎの小うちき、
○うへ白き六、紅の濃薄き一重、青きこきうすき一かされ、薄色のこきうすき一重、うへともに七つ重る也、紅のひとへ、すはうのうはぎ、もえぎの小うちき、
○白うすやう、うへも、重れも、白きを云ふ、白きひとへ、紅梅のうはぎ、くれなゐの小うちき、
○松がさね、おもて青、うら紫、紅のひとへ、もえぎのうはぎ、すはうの小うちき、
○かた櫻、おもてすはう、うらあかはな、もえぎのひとへ、さくらのうはぎ、柳の小うちき、
○さくら萠黃、おもて萠黃、うらあか花、くれなゐの單、紅梅のうはぎ、すはうの小うちき、
○えびそめの衣、おもてすはう、うら花田、紅の單、もえぎの表着、紅梅の小うちき、
此中梅、紅梅は、十一月五節より、二月まで、櫻山吹は三月まで、藤は三月四月なり、其外色々は、時をさだめず候、四月は袷のきぬにも、此色〳〵を用ゐ候、地は唐織、二重織物、只の織物、綾、何にても子細なし、常は公私おしなべて、五衣にて候、其外然るべき方は、七も八も十も、時により重ねられ候、只今は五より外は用ゐず、又うち〳〵は、きぬ一に、單をかさねても用うる也、二三かさねたるも、

子細なく候、表着、小袿などは、二重織物、又は固織物をも用うべし

漫録

女誡和解（承前）

内藤燦聚寄送

和叔妹第七

叔は夫の弟、妹は夫の妹、俗にいふこじうとの事なり、叔妹は常に舅姑の側に在るものあるが故、舅姑の心を得るには、先づ叔妹とやはらぎ睦しくすべきこと、第一なり、よりて章の名とし、その事を敎誡むるなり」

婦人の意を夫主に得るとは、舅姑の己を愛するよれり、舅姑の己を愛するは、叔妹の己を譽るによれり、此に由てこれをいへば、我が臧否譽毀は、一に叔妹によれり、叔妹の心をも、復うしなふべからざるなり、

婦人の意を夫主に得るとは、舅姑の己を愛するによれり、舅姑の己を愛するは、叔妹の己を譽るによれりとは、夫主はをつとなり、己はその身をいふ、意を夫に得らるゝには、舅姑の心にそむかず、よくつかへまたがひ、其のいつくしみを得れば、自ら夫の氣にも入るなり、舅姑の心にかなひ、其のいつくしみを得るとは、叔

妹の其身を譽るによるとなり、」此に由てこれをいへど、我が臧否譽毀は、一に叔妹によれり、叔妹の心もまたうしなふべからずとは、臧否はよしあしなり、譽毀はほまれそしりなり、前にいふところによりて言ふときは、我身のよしあしほまれそしりあるとは、ひとへに叔妹とむつましく親みて、その心をとりうしなふべからずとなり、是れ叔妹は平生舅姑の側に居るものなるがゆゑ、それと不和なれど、舅姑への執なしあしく、舅姑の機嫌をとりそこなふとなり、かくの如き事、世間にまゝあるとなり、人の婦たるもの、能々省み思ふべきなり、」

人皆叔妹の失ふべからざるとを知ることとなく、しかもこれを和して、以て親を求むるとあたはず、其れ蔽いかな、

人皆叔妹のうしなふべからざるを知るとなしとは、叔妹の際をうしなはず、むつまじくする事を知らずとなり、しかもこれを和して以て親を求むることをしらざる故に、叔妹とやはらぎむつましくすることを求むるとあたはざるなり、蔽はさへぎりおほふなり、よりてくらきと訓しよむなり、これ其の道理にくらきかなど、歎きたる言葉なり、」

聖人に非るよりは、能く過なきこと鮮し、故に顔子はよく改むるを貴び、仲尼は其の貳びせざるを嘉す、しかるを況んや婦人たるものをや、

聖人にあらざるよりは、能く過なきと鮮しとは、聖人は生れながらにして、萬物の情に通じ、天

地と徳を合するの稱なり、これ言ふこゝろは、聖人より以下の人は、あやまちなきことはあらずとなり、」顔子は能く改むることをたつとび、仲尼は其の貳びせざるを嘉すとは、顔子は孔子の弟子顔回の事なり、聖人にも及ぶべき顔子なれども、過なきにあらず、されども速に其の過をあらたむることを貴びて、其過を蔽ひかざることをなさず、仲尼は孔子のことなり、孔子も其の過を貳ひせざることを嘉したまふことなり、過を貳びせずとは、よく其過をあらためて、重ねてはせぬといふことなり、此章の語は、論語および易經繫辭傳といふに見えたり、」斯かるを況んや婦人たるものをやとは、顔子さへも過はあり、ましていはんや婦人のことなれど、過なきとはあらずとなり、

賢女の行、聰哲の性を以てすと雖も、其れ能く備らんや、是ゆゑに室人和する時は謗掩ひ、外内離るゝときは惡揚る、これ必然の勢なり、易に曰く、二人心を同じくすれば、其の利きこと金を斷つ、同心の言はその臭しきこと蘭の如しとは、此謂なり、賢女の行、聰哲の性を以てすといへども、其れ能く備らんやとは、賢女は人にすぐれてかしこき女なり、性はむまれつきなり、備はるは少しもかけることなきをいふ、こゝも前の言葉をうけて、たとへ人にすぐれてかしこき、ものごとにさとくあきらかなる生れつきの人なりとも、それ能く少しもかくることのなきやうはあらずとなり、聰は耳ときなり、哲は心さときをいふな

り、」是故に室人和する時は謗掩ひ、外内離るゝときは惡揚る、此れ必然の勢なりとは、是故には、前をうけて後の言葉を起すなり、室人は家内の人々を指す、和はやはらぎて、しかも禮義を失はざるなり、家内やはらぎて、むつましきときは、たとへ少の過ありとも、相互に掩ひつゝみて、他人の謗をうくることなしとなり、外内離るゝときは、惡揚るとは、一家の人睦しからず、我々になりて、内外のごとくそむきはなるゝときは、いさゝかのあしきことも、相互に謗ののしりて、世上へもつときこえあらはるゝを、あがるといへるなり、此れ必然の勢なりとは、必然はかならずしかるにて、勢はこれよりかれに及びて、とゞめかたきの義なり、」易に曰く、二人心を同じくすれば、其の利きこと金を斷つ、同心の言はその臭しきこと蘭のごとしとは、此謂なりとは、此句は易經繫辭傳といふ中の語なり、二人心を同じくすれば、其の利きこと金を斷つとは、二人和合するときは、其心の堅固にときこと、金鐵をも斷つべしとなり、同心の言は其の臭しきと蘭の如しとは、臭はよきにほひなりなり、蘭はあらゝぎとて、香しき草なり、心を同じくして睦しき人の言葉は、あらゝぎて花の、かをりていとうるはしく、めでたきが如くなりとなり、此謂なりとは、是等の語も皆よく和合して、心言葉のたがひそむかざるとを謂ふなり、といふべきなり、」

（つゞく）

縣居遺文

樒の舍主人　森馬太

世のことぐさのしげきまに、大かたの梅の枝も色あせて、うすくれなゐのなごりのみぞ、庭のおもになみたちける。向島、龜戸、さては小向井、大森の梅園なんども、わたらしばみつらん。夜のにしきは、紅葉にのみいふべきにもあらざりけりな。さはれ、いろをも香をも、しる人ぞ知る。わがために、さきいでたるものかは。われをまちて、眉をひらくべきものかは。そゝろあるきのかへるさに、たゞ一もと、縣居の里に見出でたるなん、よそよりも盛久しく、色ことなるにはひにはありける。わがこゝろにさへしみ入りたる、言はんかたなし。埋木のひと知れずたてらんよりは、わが花ぞのにこそは、とてうつしうゑぬ。あはれ、難波わたりの春のけしきは、誰がためのながめなるらん。

縣居遺文序

うたよみの道に、師資あることは、むかし文章生にて、肥後の進士ときこえたるはかせ、ふぢはらの長能の朝臣を師として、この道まなばれしよりおこれりとかや。このはかせ、のちに髮をそりて、能因法師といふ。あやしくこの道にこゝろざし深くして、かの伊勢の御の舊趾にては、庭の松なはたてりとて、車よりおりられたるなど、後の世にも、ながらの橋のながくかたり傳へたるは、これしかしながら、學のおやの、をしへのせちなるによれるにやあらん。今、それがしら、花をみて、歌

おもひし、月をながめてふみつくりするも、いかで、先師のをしへによらざるべき。こゝに、わがたゐの賀茂の先師、なにがしの女君たちの、ものしたまへる詠草よ、添削してまゐらせたる、其外、人々のよみうた、引直したる、すべて、詠歌の心得、ことばの用ひざま、懐紙短冊のしたゝめやうにいたるまでを、さとされたるうつし卷あり。けだし、其教をうけし君子たちの、うつし傳ふるところにこそ。それがし、これを、友がき中井乾齋の家に得て讀見るに、歌學するともがらには、二なきゑるべぶみにて、かの伊勢の御の舊趾をよぎりて、そのにはの松をあふぎ見るがごとく、いとわかずめでたくおぼゆるまゝに、おなじこゝろざしの人にも見せまほしく、ところぐ\うつしのがめたるもじどものあなるを、からがへたゞし、また〳〵おもひよれることをば、かしらがきとなし、わがたゐの道文とは、題するものなり。此卷の、もし、ながらのはしの、ながく世に傳はりたらんには、たゞをしへをうくる人のためのみならず、人をしふるひとも、車よりおるゝところなからじやは。天保の十とせといふとしの、かむな月のついたちのひ、鶴峰の戊申ゑるす。

わがたゐ道文

○歌引直しくさぐ\

賀の宴せさせたまふと聞侍りて、いはひまゐらせてなん。

一　雪ふかき松にちぎりてけふよりは
　　いくよろづよの春もまたなん

冬のいはひには、此御歌を出し給ふべし。もし春の御祝には、次の御歌よろしく候。

　けふよりは君がそのふのくれ竹も
　　なほよろづ代の色をかさねん

此御哥、はし書、いとあがめ給ふ御方の賀ならで、このまゝにてよろし。もし又、さもなく、大かたの人にて、又、よくもさきのさまをしろしめさぬ程のことあらで、賀の宴したまふと聞きて、いはひまひらせてなん。かくてあるべく、又、さもあきほどのことならで、賀の宴侍りと聞きて、いはひごとに、などゝあるべくこそ。此御哥の紙は、表もえぎ、裏すはうにて候はんなり。松がさねとまうして　いはひのかさねに候」

人のもとより、歳暮のいはひてふことをよめといひおこせけれど、

　年ごとににぎはひまさるこの宿の
　　つきせぬはるを君ぞまつらん

君ぞと、そもじまでおさへて、らんととむる例、古今集賀に、いはふ心は神ぞしるらんの類多し。又、其外には、をもじにておさへる心あれど、らんととむるなり。

　元日よみ侍る

　こぞよりも霞のころもたちぬれど
　　一しほしるきはるのいろかな

此はし書のさまにあそびして、よろしく候なり。戊申いふ、元日をもとつひとよむは、あやまりなり。元日とは、はじめのひの意なり。

さて、御詠草の御歌とも、文字多くかたく見え候。

一首に、文字一つ二つなどはありても　おなじく
は、假字ばかりにて、かゝせたまひたるぞよく候。
此たびは、たにざくに候が、たて紙などにてもか
かせ給ひ、打ちらし、はかなくかきすてやうなど
なるぞ、女君のはよく候なる。
楢の舍いふ、原書は、漢字三つ記したれど、活
字の整頓をはかりて、よきやうに改めつ。」

五月五日

菖蒲草けふとしいへどよもぎふの
やどりもわかずかをる朝かせ

此御歌は、題詠にてくるしからず候。かゝる節句
などの時にあたりては、其日のさまをよみ候がよ
く候。たとへど、あやめかつら、あやめふく、か
をるなどのこと、よろしく候。よもぎふの宿にむ
すびせたまへど、御歌は、此日に似つかはしから
ず候。題のさまによりては、よむましからねど、く
るしからずとはまうすあり。
戊申いふ、よもぎふを、よもぎうともかくはあや
まりなり。ふは生の意なり。よむましからねど
は、よむましきにあらねどとあらまほし。」

窓前螢

此如なる前の字は、月前などいふごとく、そへた
るのみにて、前の字の意は、よみ候はぬことなり。
野外などいふ外の字も、是に同じ。いはんや、窓
の前などは、猶さらなり。窓近き、まがきなどい
ふ、やがて前の心はなれぬなり。」

水無月に秋立ちける日よめる

あつさゝへまだみな月の空ながら

今日よりわきとたてるはつ風

かくてよろしく候へども、猶題詠と、はし書とはことにて、はし書に、みな月に秋立候は、見え候へば、それがうへをよみたまへかし。たとへば、いざやけふまだみな月の空ながら萩のはつ風はつかにぞ吹く、かくざまによませたまふが、よろしく候。たとへば、七夕の意をいふか、又は、一とせのなかばのたゝぬに、時のはやくうつる心か、其外、遠きおもひやりのことも候はんなり。御けいこの爲に候へば、なほさまぐ御よみ遊ばし候て、御見せ候はんかし。引直して奉るが、よろしく候はまし。御懐紙は、それに御さだめ遊ばして、よろしく候へども、たゞさまぐ、御心をめぐらされ候が、御けいこに候へば、申上まゐらすなり。

楢の舍いふ、御懐紙云々は、女君より縣居翁によせたる也。

又同じ題

たつ秋に星のあふ夜のきたがはゞ
今年はさぞなうれしからまし

此御歌、いとおもしろく候。一つ御懐紙に、前のをさきに、次に此御歌かゝせたまひて、たまはり候へ。

戊申いふ、或人いふ、きたがはゞといふこと、おだやかならず。ならふといふべき所なり。立秋が主にて、あふ夜は客なれば、あふ夜もといふべきなり。また、さぞなは、いかにとあるべし。

此説はいとよし。

身まかりし人、霜月末の二日、はかなくも、

はやなゝぬかになりぬ。ありつゝも、われはとねもごろに、かたらひはべりしことゞも思ひ出て、此はし書、申す所候はず。ありつゝなどの詞、おもしろくうけたまはり候。」

冬雲

山風のしぐれあられとふりてまた
　　ゆきげにかはる峯のうきくも

右御歌、よろしく候。

幾度かしぐるゝ空にさだめなく
　　ながるゝくもの色もさむけし

かくもよみ候へども、同じくは冬の雲といふ題は、前のごとく、一かたにさだめぬがよく候。かくては、時雨の題のさまになり行候。なほもまうさんには、時雨あられなどの雲の意は、かゝる題には、のぞきたるがよく候、何となき雲に、冬の心をそへてよみたまふべきなり。すべて、春夏秋冬を上におきて、何のくも、何の山などいふ類の題は、皆しかやうの心にて候、雑の物に、時の季を添へ候事にはべり。たとへば、冬の鳥といふ題には、千鳥、鴛鴦、鴨の類はいはで、雪のあした、霜のあしたなどの庭たゝき、又は、雪のふる山がらすのことなどよみ候心なり。」

（つゞく）

村田春海歌がたり（承前）

松野操雄

世に近體古體といひて、わかちよむひとあるは、うたは、たゞひとのくちまねする、そらごとゝ

おもひて、こゝろのまことを、いふものとも、おもひたらずやあるらむ。こは、後の世の題詠のみに、こゝろそみて、いにしへのひとの、おのづからに、いひ出でたるを、まことの歌なりといふ事を、さとらぬひがわざなり。うたは、わがすがたをたてゝ、うつらぬやうにこそ、よむものなれ。そのすがたをたつるは、われに、よく學び得て、我ものとなれるときぞ、そのけぢめは、わかるべき。そは、ひと〴〵の、こゝろの引くかたありて、いにしへを、むねとこのめるも、また、後の世の手ぶりをまねぶも、また、いにしへ、今をまじへとりて、ひとつ、おのがすがたをたてゝ、よまむひともありぬべし。さて、そのさまに、よしあしはありぬべけれど、ひと〴〵、おなじからぬこゝろ、

まことの歌なれ。さるを、我むねとたてたるかたはなくて、ひとうたは、古體に、ひとうたは、近體によまむ事は、たはれたるわざならずや。ときにより、ことにふれて、いにしへのさまにも、後の世のさまにも、おのづから、わかるゝ事も有りぬべけれど、ろも、また、ひと〴〵の、たてたるすがたは、かくれぬものなるをや。しかるを、ことさらに、おもひまうけて、題をわかつごとく、はじめに、こは古體、こは近體などいひて、よまむとするは、いたく、ひがわざなり。もし、たはむれに、いにしへのひとのすがたに、なずらへよむ事などは、をりにふれては、なすべけれど、そは、常になすべきことゝもおぼえず。さて、近體、古體と、つねに、わかちをなさむとおもふは、か

ら歌に、古詩、近體とあるに、ならひたるものと見ゆれど、そは、似たることにて、おなじたぐひならず。からうたに、近體といへるは、四韻絶句の律詩をいひ、古詩といへるは、漢、魏より、六朝までのすがたをいへるなり。その律詩は、聲律のさだめありて、句のかずも、さだまりあり。古詩は、句の數のさだまりもなく、聲律の法もなし。されど、今體と古詩とは、そのけぢめ、いちじろし。いま、やまと歌を、しむらく、かれにたとへいはゞ、みじか歌は、絶句なりと云ふべし。さて、絶句に、唐の世の體あり、宋、元、明の體ありて、とり〴〵なれど、ともに近體なる事は、ひとしきなり。さるは　宋、元、明の人のつくれるにも、おのづからに、唐詩をまじへて、みもわかねもあ

なり。また、唐とは、ことにて、その世の手ぶりなるも、あることなり。大和歌も、それにことならず。藤原、奈良のころを、はじめとして、新古今よりこなた、いまの世によむなるも、おなじ短歌なる事は、唐の絶句と、後の世の絶句と、おなじことなるがごとし。うたのさまは、世々に、うつろひきぬれど、おなじみじか歌の體なれど、新古今のころなる人のうたにも、そのすぐれたるは、萬葉、古今にまじへつべきもあなり、かゝれど、ひとつ、みじかうたの上にて、近體、古體と、さだかに、わかちをなして、よまむとおもふは、あたらぬ事なり。さるを、近體、古體と、しひて、わかたむとするは、萬葉のすがたなるうたは、かならず、萬葉のこゝろことばをもちひ、後の世の

すがたならむには、かならず、後の世のこゝろ詞のみを用ふべしと、かたくなにおもひて、そのけぢめを、たゞしくなをす、たけき事におもへるならめど、たゞ、かりそめに、にせもの、つくるごとくなさむは、何のかたき事かあらむ。そは、いたく、うきたることなり。いにしへのさまなるも、後のさまなるも、年月に、よく學得て、おのづからに、そのすがたうつりて、わが常となりたるをこそ、その體を、えたりといふべけれ。さるを、あはつけきこゝろに、あるは古體、あるは近體などいひて、たやすく、まねぶべきものとおもへるは、よく、うたのすがたを、我ものに、學得るわざを、しらぬ人のこゝろなり。今、こゝろみに、さる人々のうたを見るに、古體といふも、近體といふも、むげにつたなくて、よく、そのあじはひを、しりえてよめるなりと、おぼゆるはあらず。歌のこゝろを得たらむ人のみは、かたはらいたき、わざとやいはむ。いにしへを、まなばむとならば、いにしへをのみ、もはらとなすべく、後のすがたをこのまば、後にのみ、心をよすべし。ふたつながらに、えむとするこそ、をこなれ。人のこゝろの、ときにのぞみて、白くも黒くも、おもふがままに、うつしかふべきものならば、さるわざも、あしつべけれど、こゝろは、たれも、二つなきものなるをや。いにしへのさまに、ふかく、そみたらむくちよりは、後のすがたは、なしえがたく、のちのさまを、よくよみたらむ人は、いにしへには、うつりがたかるべし。こは、もとのおもむき、

こゝろのもちひどころ、ことなれど、さらでは、かなはぬことわりなり。まことに、歌、よく、學得たらむひとは、このこゝろを、わきまへぬべき事ぞかし。

（つゞく）

歯の堅き人　な、　あ

松平樂翁　越中守、定信、文政十二年五月十三日歿、年七十二、

歯のかたきものありけり、石など嚙み碎くを譽れの如思ひにけり、一人の男は生れてより歯やはらかにて、堅きもの嚙むことを得せず、

さるにかの石碎く男、歯の一つ動きて腫れ痛みけれど、此の一つの歯の爲に、もの食ふとも心よからず、とて、ものを打わてゝ、その歯を拔きにけり、夫より又、昔へ歸りぬとて、石など嚙み碎きけれど、人も皆譽めのゝしりたるが、一年もたゝざるに、かの打わてし隣の歯、殊に腫れ痛みて拔けたれど、左右の隣の歯又拔けて、遂に半ばおちてげり、殘ると見るも動きゆるぎて、無きに劣るさましてげり、

かの生れてより、やはらかなる歯の男は、今に變らず歯一つも落ちずとて、また今にては負ふ（自漫する）を、歯無き男歯ぎしりをして怒らんも無きをとて、人も笑ひにけり、

（ものも手もちによりてかくの如し）

婦女髪様（安永八年版）（承前）

井上頼文　寄贈

はり出し　志ゆすびん
腰をり志まだわげ



中なでびん
かせわげ





上總下總の兩處女

稻園子

おのれ、さいつ頃、下總國鴻臺にものして、其のかへさ、眞間の里を過ぎり、手兒名の墓所をとぶらひて、處女心の一すぢに、うつろみの世をはかなみ、遂に自ら失せにきといふ昔をかなしみ偲ひ、はては、ろの頃ときめかして、多くの人惑はしけん上總國末の珠名のことさへ、思ひ出だされ、今の時に引きくらべて、轉々感に堪へざりき。このふたりは、古より歌にもよみ、文にもかゝれ來つるものなり。その事蹟は、故人齋藤彦麿ぬしの記せるがあれぞ、左にかゝぐ。

珠名　手兒名　齋藤彦麻呂

上總國末の珠名は、いみじき色ごのみの女にて、容

貌美麗なるうへに、よき衣を着、よく化粧して、門にたちて道ゆく人を惑はし、ひるよるといはず、あまたの男いり來りぬるに、ことぐくあへるよし、萬葉集にあり、（末は今の周淮郡なり）

下總國眞間の手兒名は、それとは、うらうへのたがひにて、容貌世にすぐれてたぐひなけれど、みる人きく人、心がけぬはなきをいとひて、髪もつくろはず、あしき衣着て、履もはかず、見ぐるしくすれど、猶錦綾につゝめる、美麗の女にもまさりて見ゆる故に、人々心をかけていひけるを、いくばくもいきながらへぬ身にて、何にかせんとて、海中に身をなげてうせにし事、こも萬葉集にあり、上總と下總と並びて、珠名處女のあだめきたると、眞間の手兒名のまめなると、よき一對なり、二幅の繪にかゝせまほしくなん、（この繪のおもふき、晴圃登邦にかゝせたり、）とあり。其の爲すところ、珠名は云ふに及ばず、手兒名といへども、嘉すべき程のことにはあらねども、其の心の程のたがひは、月と鼈との如く、雲と泥との如し。世の媛達、この兩處女の行、いかにか思ひ給ふぞ。

四季の今様　あゝま

清水濱臣　江戸の人、文政七年八月七日歿、年四十九、

春

春も半はすぎの戸を　押しあけ方に見渡せど
軒端の雲はさくらにて　ろば降雨こそ香に匂へ

夏

雲間の月もやどる也　水鷄の聲もえきるなり

橘かをる夕風に　岩もる淸水涼しくて

秋

秋ふく風の芭蕉葉に　二聲三聲おとづれて
窓より西に月かげの　傾く見るこそ哀れなれ

冬

冬ごもりする雪の夜に　閨の埋火かきおこし
岩燒しづが生業を　思へばいとこそ哀なれ

畫師の妻

江見水蔭

其六

雪を跳ねたる園の竹、妻は良人の手を取りて、吾娘の傍に連れてゆき、眠れる顏を指示して。　まア御覽なさい、此子を………ト、上の搔卷少しく捲れた、良人はにこ〳〵打笑みつ。　好く寐て居るねえ、何も知らずに、此まア好く寐て居る事わ………。　此可愛らしさを御覽あそばせ。　かうやッて居る處を見ると思出す、いつかキウピットを畫く時に、此子を摸範に寫生しやうと思ッて、木の葉一枚に仕た事があッたッけ。　彼時厭だと言ッたのを、お前は今神の御使になるのだから、其

様に言ふのではないと言ッたら、本統に神様の御使に成るのかと思ッて、音無しく、動かずに、しかも泣かずに、あの笑ひかけて、笑うては悪いか、今笑うてはキウピッドたるの資格を失ふかと問ひたげに、ぢッと此方を見て居たが、噫、其神の御使たる品位はいまだに保ッて居る。此小さな手を投出して、蕾の様な唇をしッかりと結んで、他愛もなう寐て居る處…………喃、お光、此子は全く神様だよ、ト言ひつゝ恐る／＼指もて其頬を撫でぬ。　あれ、お止しあそばせ。眼をさましますよ。

なァに神様だもの、起きやァ仕ない…………。　其神の様な文子でさへ、夢にまで心配して居ますのを、貴郎には御分りなさいませんか。　何、文子が心配して居る…………そんな事があるものか。　仕て居る處では御坐いません、貴郎の事を大變に御案じ申して居ります。　何故！我には分らないよ、お前の言ふ事も分らないよ。　妾の申す事が御分りになりませずとも、最先文子が寐言の中に申した言葉は御分りに成りましたらう。　あゝ、何んとか言ッたッけ…………。　家の御父様はヘッポコ畫師ではありませんと申しました。　あゝ…………。　あれは文子が自分の友達に、貴郎の悪口言はれて、それを辨護して居るので御坐いませう……

……如何した物か世間では、貴郎の事をあまり賞めないやうで御坐います。それは我も知ッて居る、だが、我の思想で好いと思ッて書いても、それが世間の眼では拙く見ゑるのだから仕方がないさ。　如何で御坐いませう、此頃に世間を驚かす程の妙筆を御揮ひなさッて、後の世までも遺る樣なのをお書きなさいませんか、ト好き潮時に纜解きて希望の海よ乗出さむとす、風も亦追手なりけり。　うむ、書いて見やうか、ト勇立ちて良人は言ふ。　お書きなさいまし、是非お書きなさいまし、屹度よろしく書が出來ませうよ、妾は樂しみで御坐います、貴郎が精神を凝してお書きなさるのを傍で拜見致しますのは、どんなに嬉しいか知れません。貴郎是非大書におかゝりなさいまし。　だが、お光、急には出來んぜ。　それはもう一年おかゝりなさらうと、二年、三年、それぞッかりにおかゝりなさらうとも、ちッとも構ひは致しません。其間妾が何致しまするから、決して他の事には御心配なく、一生懸命に御遣りなさいまし。　遣ッて見やう！遣ッて見やう！ト彌々浮立ちて來りぬ。扨て又急に腕を組みて。　だが……お光！ト言ひかけて氣毒さうに妻の顏を見守り。　旅で余程遊んで來たのに、又お前に仕事をさせて苦しい目





さするのは…………。　いえ〳〵その御遠慮には及びません、妾も畫師の妻で御坐います、それ位の事は致しますから、貴郎は只お畫きなされば好いのです。　畫きたいのは畫きたいけれども、しかし如何してもお前に氣毒だからなア、ト頭を搔きぬ。斯くて又思直して。　けれど其畫さへ出來れば、何アに、お前にも文子にも苦勞はさせない、其畫さへ出來れば、何アに、何アに…………。　それでは本統に御かきなさいますか。　畫くとも〳〵大いに畫く。　嗚呼それで妾もヤッと安心が出來ました、如何か天晴見事の畫を御仕上なさるのを今から祈ります。　旅で鍊へて來た妙想を一生懸命に畫出せば、なアに、今の世を轉覆させる位の事はわけはない。後の世に傳へて、我ある事も、それを仕上げさせるにお光と言ふ妻のあッた事も、千萬年此地此人のあらむ限り知らして吳れるぞ。さアいよ〳〵それときまればもう今までの古木落水ではない、ト自から震ふ腕を撫りながら立ちぬ。これを見て心の底より湧出でたらむ如き笑は妻の面にあらはれぬ。雲散じ雨霽れて朝日に匂ふ家櫻花。

（完）

文林

江柳

釣舟もまだかげ見えぬはるの江に
まづ糸たるゝきしのあをやぎ

近衛　忠熈

遠村柳

朝な〳〵かすみとともに靡くなり
のすゑの里のあをやぎのいと

毛利　元徳

青柳のなびくすがたはほのみえて
はるかせかすむ川つらのさと

東久世通禧

みわたしのとは山里もふくかせに
靡くやなぎはかくれざりけり

鍋島　直大

かすみたつのすゑのさとの夕暮に
靡くけぶりはやなぎなりけり

長岡　護美

牛ひきてかへるわらはも見ゆる哉
やなぎの奥やのむらなるらん

高崎　正風

青柳のいとのどかにも打ちなびき
かすみて遠しやまもとのさと

津輕　承昭

うら〳〵と霞む野末にあをやぎの
綠もふかきやまもとのさと

前田　利嗣

宮地　厳夫

青やぎのみどりのひまに遠さとの
わらやもみえてかすむ春かな

小出　粲

うちわたす野川の末のやなぎはら
霞むやさとのかきねなるらん

坂　正臣

うちわたすなみきの柳はるゝせに
靡けむみゆるやまもとのさと

植松　有經

里人のいへはかくれてやなぎのみ
たてるのべともみえ渡るかな

谷　勤

草もまだもえぬ野末のひとむらに
みゆるみどりはやなぎなり鳬

内藤　存守

朝けたくさとのけぶりの横ほりて
やなぎを遠くみするはるかな

春月　林　甕臣

うめが枝にきゐる鶯もおきよ〳〵
寝られんものかこの朧つきに

ひゝなあそび　藤井　行麿

御妹脊をいつくと思へむ處女子が
ひゝなあそびもくにたみの道

卿氏のはしゐの隨意莊十二景の中

濹上櫻雲　三浦　千春

花のくもかゝらぬ方もなかりけり
このたかどのにさしむかふ島

佐竹義隆侯夫人　佐々豊水

竹の子の直きこゝろをはらからに
　さとしゝふしの高くもある哉

春雨　有吉秀太

我がにはの花も色香をそへにけり
　めぐみも深きよはのはるさめ

達村柳　鍋島榮子

雨はれし野末のさとのかきねかも
　ほのかにけぶるあを柳のいと

松平健子

打ちけぶる柳のかげにいとゞしく
　かすみてみゆる山もとのさと

山田稲子

あさげたく烟はきえしとほさとに
　殘りてなびくあをやぎのいと

鶴久子

山はたの麥生のすゑにうちかすむ
　やなぎや里のしるべなるらん

霞がくれに雁のとぶを見て　尾崎すう子

うしろ手を誰にかつゝむかへる雁
　三つよつふたつ聲のみはして

對鏡　安東菊子

ますかゞみ對はぬ朝もなきものを
　いつもとゆひに霜はおきけん

尋若菜　千々波橘子

春はまだあさ澤野邊のをちこちに
　わかな尋ねてゆくをとめかな

月下千鳥　三宅二枝子

月かげも須磨の浦わのさゝなみに
こゑうちそへて千鳥なくなり

野まうぐひす鳴く　松浦　辰男

春霞かすめる野邊を　初花の匂へる野邊を
ふりはへて吾問來れど　鶯はよどふに似たり
鶯は歌ふに似たり　鶯の呼びて謡へど
あやもなきおのが只言　中々にうたふ爲方なし
さし出て謡はんよりも　鶯に春の調を
謡はせてわれは聞まし　春のしらべを
色もなき我言の葉はなにかせん
うたへや謡へ野邊のうぐひす

船路の記（つゞき）　故人　藪氏

廿五日、明け行く空、霧立ち渡りて、海の面おだやかなり。夕づくまゝに、あすは、こんぴらにまうでむといふに、こゝろつかひもあなれや。

廿六日、まだよふかきに、こゝの浦の舟人、舟よそほひて來れるに乘りて行く。多度津といふ所に、舟よせてあがる。かりのやどりをもとめて、やがて立ち出で、行く。こゝより百五十丁とかきこえぬれど、しらぬ道なれど、ほど遠くおもほえぬ。山のかたち、象といふけものを見るにかよへり。其まなことおぼしき所に、みやどしら、ふとしきたて、おはしますとぞ見ゑぬ。きゝしよりまさりて、たふとかりけり。ふしぎにまうでつることよと、かたじけなく、なみだのみこぼれぬ。こゝろことどおよびぬ、おほんみや所にぞ有りける。

また、しらかた、屏風の浦、善通寺とかやにまうづ。弘法大師の誕生まし〳〵ける所とぞ。唐めきたる堂塔がらむ、そりはし高くかけて、渡どのあり。木立ものふりて、おくの院は、はるかに、あけの玉がきかゞやきて、茂れる松の木の間ふかし。もと來し道に出で、今朝とひし多度津のやどりにつきて、湯をそゝぎ、やすらひて舟にうつり、初夜過ぐる比、泊りの舟に歸りつきけり。

廿七日、朝より舟をいだす。けふも曇りがちにて、舟はかゆかずみゆ。まろがめの城下、三本松もみゆ。さみのしま、よし田のおはひを行き、水嶋の沖にかゝる。潮よくなりて、よもすがらおす。

夢に見るふるさと人の面影も
たえてさびしき波のあけぼの

廿八日、夜明けかた、さぬきの手しまに火あり。よべより朝までおす。潮あしゝとてかゝる。雨ふり出で、俄に舟をいそぎて、うしまどのうらにゆく。

雨になる舟路は風のいでぬ間と
泊りをいそぐうしまどのうら

いろぎ着きぬるに、さえきの舟のか　り居しは、潮よしとて、やがて漕出でぬ。太鼓鐘打ちならして、船はぬりたるもぬらぬもあるが、まくしばり行くさまにぎはし。ふかくこうじたる折からなれど、いとはれ〳〵しくおもほえぬ。雷とゞろき、雨しど〳〵ふりて、西の風に雲はれわたる。こゝちよし。舟出なむ、けふあすの内に、あがりなむといふに、こゝろつかひおぼしや。

廿九日、そらすみやかに晴れて、追風出でむといふ。朝鮮の人の旅やかた見ゆ。塀は竹を、ひま多く打ちてすきたり。おどしまたかく、障子たてつづけ、浦のとまやにことなりてめづらし。瀬戸には、燈籠堂あり。嶋山の景色おもしろし。

　牛まどの名もわすられて風はやみ
　　眞帆に出でぬるけふの友ぶね

こぎ出でぬれど、波は日の光に映じて、沖の方より、こがねの花ひらの、ちりにちりて、みだるゝとぞ見えし。ゆび手はさこし、めてはえしま、風よくて、ほどもなく船とめて、はし舟さしよすれど、乗りうつりて、さこしの磯よあがる。しばし山のこしをめぐりて、むろまちに出でぬ。むろの明神にまうでぬ。陸にあがりて、こゝろよくあゆみぬるもうれし。あなたかなたみめぐりて、いま午の刻ならむといへど、しよしやにこゝろざしおもむきぬ。この道に、津の宮とて大社あり。いづこともしらぬ、さと〳〵、岡山を越えてゆくに、なにはの人とてあひぬ。しばしがほど打ちつれて、そこかしことをしへぬれど、見つゝ行く。漸くしよしやに至りぬ。登りぬれど、女人道あり。禁制としりせど來るまじを、いたづらにこうじたることよとわびしく、かりの宿をとひてふしぬ。

晦日、とくより出でゝ、そねの天滿宮、石の寶殿にまうづ。生石子の命、今一かたはわすれぬ。そねは拜殿あり。みあらかには、とくさ色の金襴のへりとりたる御簾おろして、天井に四つにわりて、黑ぬりのふちうちて、金ばりにして、龍あむどの

かたかきたり。左のかたにならびて殿あり。皆金はりにして繪かけり。松はいがきことに廣くゆひまはしぬ。見れどふとくまがりたる三木の、あまりたかくはなくて、枝のしだり〲て、すゝれひろごり、さしそふ枝、かずしらずさかえて、その風情たぐひなくめでたし。茶をうるたなきよし。池もあり。水といふ文字のさまにかよひて、橋もかゝれり。杜若おほし。高砂にもうでぬ。高砂の鳥井外、右にはしほはまあり。樓門を過ぐれど、まひ殿、神のおましの左にあり。相生の松は、あか松黑松ひとつにあひて、一木とありぬ。うるはしくさかえひろごれり。尾上にまうづ。をのへのかねは、まなごのざうしのをさめ奉りしとぞ。からのかねに、ほとけのみすがた鑄つけて、常のかねとは、ことさらにかはれるなり。出でむ音こそゆかしかりしか。むかしの相生の松はふりたるが、二尺許りにして、ふるく手なれたる木を、ふたつ取り出でゝ、僧のよそ人に見せられけるを、わきよりぞ見し。今の相生の松は、若し。うら門よりいでゝ、力田山鶴林寺とかいふにまうづ。年ふりてたふとき寺あり。堂の前をよこぎり、うらもんより出でゝ、山口といふ所に行く。道すがら人にとひ〲て、たそがれ時につきぬ。宿りをとひてかり枕しつ。

（つゞく）

雜報

●洋服洋食　決してあしといふにはあらず。されど、今我が國にては、さる生活をなすに難かれど、いかにぞや覺ゆ。ことに婦女子に至りては、尙更のことなり。況んや、歐米婦人の服裝は、衛生上洪害あることを、彼の邦人すら、唱導するに於いてをや。かつ我が國從來の服食は、費用の點に於いて、之を得るに容易なるに於いてをや。女子高等師範學校にては、是迄生徒に洋服洋食を給するの制度ありしが、是等の生徒が、卒業の後、出で丶各地に敎職となるに當りては、西洋流の生活をなすべきにもあらねど、往々不都合を生ずるよし、屢ゝ耳よし、甚だ心ゆかず思ひ居りしに、このたび細川仝校長は、斷然この制度を廢し、自今我が國在來の服食を給することゝなせりといふ。この一事、亦仝校敎育の方針を知るに足るべきか。

●細川氏の演說　左にかゝぐるは、細川潤次郎氏が、過ぎつる日、新式歌文協會開會式に於いて、演說せられし筆記なり。讀みもてゆくに、亦稗益なきにあらざれど、こゝにのすることゝなしぬ。

我國文の端緒を開きたるは、蓋し開國の始に在る可し、此より以來、學藝の進むに從ひ、國文の光輝、漸を逐うて發揚せり、其間世態に變遷あり、文運に隆替ありと雖も、文人學士より以て閭巷の人に至るまで、各自の思想を吐露し、當時の事蹟を記述して、燦然觀る可きもの、固より少しとせず、輓近德川の太平を致すに至りて、學藝進み、文章愈盛なり、而して明治維

新の後に至ては、敎育の方法復前日の比に非ずして、文章の隆盛、前日に超軼せり、然りと雖も、文章の道に於て、猶未だ缺典あるを免れざるに似たり、今日の文章は、漢文に訓點を加へたる者の如くならざれども、西洋の文章を飜譯せる者の如し、普通俗文の如き、之を書牘の類に用ふるは、則可なりと雖も、未だ以て精微の義理を述べ、曲折の意味を悉すに足らず、和文は我國固有の文體なりと雖も、今日の和文と稱するものは、所謂擬古文と曰へるもの多くして、其効用を論ずれども、漢文若くは詩歌に類似せる者、即ち美術に屬すべき者にして、今日一般の用に供すべき者に非ず、此に由て之を觀るときは、我國今日常用の文章、未だ固有の体裁とすべき者あらざるに似たり、同志の諸君、此に慨する所あり、此會を創設し、諸大家の意見を聞き、取捨折衷して、國文を發達せしめ、一般の需用に適せしめんとす、是我輩が本會に切望する所にして、即此擧を贊成する所以なり、之を要するに、本會の旨趣は、國文固有の文體をして、完全ならしめんと欲する者にして、之が爲に、他國の文體を以て、參考に供する者なり、他國の文體に摸倣して、以て一種の文體を構造せんと欲する者に非ず、從來の和文、俗文、漢文、飜譯文を排斥する者に非ず、又此等の文體を、強て混同せんと欲する者に非ざるべし、而るを本會の名に、新式の二字あるを以て、各其偏倚する所に從ひ、奇を眩し、怪を弄するが如きこ

とあるが如きは、本會の旨趣に非ずして、我輩の决して贊成せざる所なり、爰に本會の開會を祝すると共に、一言して以て將來を戒む、

●女子成立學校　全校は、去る三日、第五回卒業證書授與式、及び第六回紀年會を、淺草鷗游館にて行はれしが、來會者四百名に餘り、殊に盛會なりき。而して今回は、左の卒業生を出だしたり。

高等科全科	三田さめ
高等科の中修身、禮式、和漢學、習字、點茶、箏、裁縫	横山柳
高等科の中和學習字撰科	高橋泰
本科全科	小浦範
同上	清水菊尾
同上	船山成
以上一の組	
同上	佐野富
同上	小田桃
同上	安川富士
同上	中根綱
同上	佐藤節
同上	飯田家満
以上二の組	
本科の中修身、禮式、和漢學、習字、歴史、裁縫、撰科	本間美佐
手藝科全科	内田百合代

以上十四人

●櫻　さしも盛り久しく咲き匂ひし梅の花も、この頃の春雨にちりはてゝ、いたづらに怨をのこしつれど、この春雨やがて、人の心ののどけかるべき櫻の花を催せるぞ、ことにうれしき。學の窓に、よるとなく、ひるとなく、書よみものかき給ふ孃達よ。さかりに程もあらじ。咲きそろひなむ、花ゆゑならむ、一日の隙も何かあらん。いかで、かぞいろはとともに、愛で給ひね。花に肖えて、清くにほはしき大和心を養はんためにも。上野、飛鳥山、向島、御殿山、小金井わたりの花の時は、世にまたと、類ふべきものはあらじかし。

けふこずはあすは雪とぞふりなまし
消えずはありとも花とみましや

敎の庭

四月五日兼題　柳靡風

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

青柳のなびくを見れどさくはなの
　のどけき春もかぜはありけり
愛媛縣松山市萱町六丁目　田村千代子

地

打ちなびく柳のいとのなかりせば
　たれかのどけき風をしらまし
埼玉縣北足立郡浦和町　松井たまみ

人

青柳のみさを丶知らで吹くかぜに
　なびくとのみも思ひけるかな
長野縣長野町　勝家貞子

たま丶ぬく朝露きよしあをやぎの
　糸よりかくるにはのはるかぜ
勝家良子

吹くま丶にのきの青柳うら／＼と
　なびくや風のすがたなるらむ
高井繁子

春風のやなぎのえだに見ゆるかな
　なびくすがたの長閑なる世も
伊藤かね子

さほ姫のかみかき亂すすがたかな
　風になびけるあをやぎのいと
宇多田楊子

青柳のいとゞ折り／＼見せてけり
　ふくとしもなき風のすがたを
平山ゆふ子

青柳のいとくりかへすはるかぜは
　にしきおりだす始めなるらん
河野文子

人目にはなびくと見せてはる風に
　とけぬこ丶ろやあを柳のいと
師岡千代子

衛士のたく煙と見しはうちなびく
　みはしのもとのやなぎなり鳧
松田靜枝

吹く風よなびくやなぎの匂へるは
　いづこの梅のめぐみなるらん
松田いし子

あゆ子つるころとしなれど青柳も
　風にまかせていとたれにけり　松田もと子

青柳はかぜのまに〳〵なびくなり
　ものあらそへる人に見せむや　松田つぎ子

吹くかぜになびく姿はやさしくも
　たをるにかたきあをやぎの糸　澤　滿壽子

さほひめのみどりにそむるいと柳
　風のまに〳〵むすぼゝれけり　黒田さま子

青柳のすがたはかぜにまかすらん
　そよとふくだに打ち靡きつゝ　千々波橋子

さほひめのころものたてか柳はら
　花田のいとぞかぜによらるゝ　佐々有鄰子

あさみどり柳のいとはたえ〴〵ゝ
　風のまに〳〵うちなびきつゝ　堀内　安子

音にだにたてずふきくるはる風を
　よそにすごさぬあをやぎの糸　高橋　政子

心なく吹きなみだしそさほひめの
　くりかけてほすあをやぎの糸　藤澤　元子

よりかけてむすびしいとを春風に　高橋千代子
　吹きみだされてなびくあを柳

たをやめのかみとも見ゆるいと柳
　削りそめたるけさのはるかぜ　山田　先子

うるはしきみどりのいとも春風に
　打ちみだれたる春のあをやぎ　太田　粂子

かゞみいけきしのあをやぎ春風に
　水のうへにも打ちなびきけり　大亦　隆子

吹けどなほ心にそまぬかぜにだに
　なびくやなぎぞ優しかりける　内田　慶子

たえまなく吹く春風になびきつゝ
　解けてはむすぶあをやぎの糸　内田　雪子

春たてどふく風さへものどかにて
　ゆたかになびくあをやぎの糸　稲木いね子

打ちかすみ吹くとも見えぬ春風に
　なびくやなぎの影ののどけさ　山中　糸子

打ちはへてなびくを見れど青柳の
　いとのどかにも風は吹くらし　植木　鋼子

君が代ののどけきはるのやなぎ原
　かぜにおびかぬ糸なかりけり　南大路素子

青柳のむすびみとけみいとまなく　南大路正子
かぜにまかする春のいろかな

なつかしき柳のいとにひかれては　南大路芳枝
風もこゝろのいそがざるらん

春風のかすみふきとくかなたより　上松　菘子
なびきてわたるあをやぎの糸

たえまなくなびく柳のあさみより　上松　直子
風のすがたをいとにみせつゝ

たちこむる霞は消えてはるかぜよ　花山やすね
打ちなびくなりあをやぎの糸

吹くかせに柳のいとのあやなすは　花山みさを
いふにいはれぬながめなりけり

吹くかせにまかせてなびく柳こそ　松葉しゆん
のどけき春のすがたなるらめ

心までまかせぬものか吹くかぜに　濤川　敬子
なびけど折れぬあをやぎの糸

みぎによりひだりになびき青柳の　濤川さわ子
糸こそかぜのこゝろなるらめ

青柳のいともしづけきはるかぜに　飯田　梅子
こゝろひかれて打ち靡くらむ

吹きさそふ風のまに〱靡けども　雲井　花子
いかでか折れむあをやぎの糸

吹く風にゆきかふ人をとゞむるは　佐藤　敬子
なびくやなぎのすがたなりけり

春風になびくやなぎは佐保ひめの　青木はる子
ねみだれ髮をけづるかと見ゆ

池水のかゞみにうつるあをやぎは　伊東喜代子
ふく春かぜにうちなびくらん

糸やなぎむすびみとけみうち靡く　足利世根子
すがたや風のすがたなるらん

うちなびく柳のいとをぬきにして　狩野　秀子
波のあやおるいけのはるかせ

春風の吹きのまに〱あをやなぎ　富田仁壽子
こゝろしづかに靡くのどけさ

打ちなびくかせの柳ははるの野に　谷　けい子
あやおる糸と見えまがひつゝ

たまをぬきみどりをそむる柳すら　淡海香女子
風のまに〱打ちなびくなり

水の面にやなぎの糸のかげ見えて　上原とみ子
かぜのまに／＼綾にしきおる

長閑なるかぜになびける青やぎの　山田　璋子
みどりぞ春のけしきなりけり

春風のふきのまに／＼なびけども　溝口奈保子
すがたくづさぬあをやぎの糸

ふくかぜに折れぬみさをの青柳の　押尾きく子
糸のみどりぞゆかしかりける

あさみどり花も一つに吹きさそふ　二葉まつ子
風にあやなすあをやぎのいと

霞にもはなにもいとふはるかぜに　高瀬たか子
ひとりのどかになびくあを柳

春ふかくよる人もなきわがやどに　高野みゑ子
かぜにみだるゝあをやぎの糸

糸やなぎ風のまに／＼なびけども　小山みゑ子
をれぬものこそみさをなりけれ

春風にこゝろうかれて立ち出れど　平島わやう
やなぎの糸もともになびけり

うら／＼と風のまに／＼靡けども　妹尾ゆう子
手折り難きはやなぎなりけり

水の綾おりわたしても見ゆるかな　佐藤みゆき
かぜになびけるあをやぎの糸

もゑぎなる煙とぞ見るあをやぎの　藤原きくを
風のまに／＼なびくすがたを

おしなべて吹くとも見えぬ春風に　桐　たみ子
青やぎのみは打ちなびきけり

吹くかぜに波のあやおる青やぎの　矢嶋婦爾子
みどりの糸にゑくものぞなき

ふくとなき風になびきて夢の跡の　橋本數江子
長きはる日をみするあをやぎ

春風にかみをけづれるあをやぎの　飯室登美子
すがたをとむる庭のいけみづ

いとまなくなびくを見れど青柳の　飯室　照子
春のこゝろはゑづけかるまし

打ちなびく柳のいとゝ見えにけり　菅野　章子
のどけき春のかぜのこゝろは

靡きつゝなみもてあらふ青やぎは　山口　明子
うき世の塵をはらふとぞ見る

吹くとなき風のまに／＼かつ靡く　水上千代子
　やなぎの糸のけさのしづけさ

誘ひ來るかぜのまに／＼靡くとも　竹下すい子
　すがたみださぬあをやぎの糸

春風にみどりふかめてのきちかく　竹下きみ子
　なびくもきよしあをやぎの糸

亂れゆくかすみの袖をぬはんとや　稲田　君子
　やなぎの糸をかぜのよるらん

長閑なる風のやどりに打ちなびく　稲田　晴江
　やなぎや春のすがたなるらん

こゝろなきやなぎの原も靡くかな　犬塚　圓子
　花の香おくるかぜのまに／＼

四月五日兼題　野あそびの詞

天　東京芝區三田四國町　師岡千代子

はる霞たな引わたるころは萬のどかにおもしろかれど隔なき友と野べに遊ぶばかり心ゆくとはあらずかし朝とく霞を分けてとめゆけどつまこふる雉子ちゝとなく雲雀まづめづらし人多からねど心のどかに氣安く口々に唱歌などいひてたどりつゝそこはかとなく生ひ出でたる菫たんぽゝつく／＼しあどつみはやすいとたのし漸く日たけて遠近の人もいで來つる中に親しき友の打まじりたるは又なく嬉しうなむともに持らしたるわりごとり出でものしつゝ人少き程よりはまだはえある心地しておの／＼競ひ顔につみつゝ日たくるも知らずわくがるゝこそ樂しく嬉しきすさびありけれ雉子の聲も聞えずあがれる雲雀も下りきて人々も歸り行くに「けふばかりはくれずもあらなん」など口ずさみもせられてなむ

地　長野縣長野町　勝家　貞子

よひより降りしきりし雨の名殘なう晴れわたりたる朝の空の景色常よりもいといたう霞こめて花の色鳥の聲そこはかとなく長閑にめづらしう見え聞ゆまして片岡のわたりもえいでたる小草のまたうらわかき葉毎に白玉を消げに結びよそひて一しほ緑の色を深めたれどおのづから人の心もうかれいでゝいぶせき庵の中にはなか／＼籠り居かたきを

ゆくりなく隔てなき友の訪ひ來りて近きわたりまでいざ〳〵とそゝのかせむあやしう心を合せたらむやうにて嬉しとも嬉しく打ちつれたちていでゆきぬ麥生の青みたる菜花の黄金色なる飛びかふ蝶の三つ四つ二つ舞ひ戯るゝなどいづれかながめの内ならぬ里はづれよはうきことと知らぬ童等の紙鳶飛ばしつゝあくことを知らに遊べるさまいとたのしけなり名も知らぬ木草の花のおのがいろ〳〵こきませて春の錦をおりなしたるすみれの床をあくがれし雲雀の雲井隠れに聲のみ聞ゆる妻こふる雉子のあなた此方にのし羽打ちつゝなきしきりたる名も知らぬ百鳥のおのがさま〳〵うたひ囀りあふなどいひ知らず哀れなるにましてものめづらしき少女どもの袖ふりはへて小籠さゝげつ芽花つく〳〵しなど摘みはやしつゝ春の日もなほ短かしとおもへるさまこそいはんかたなけれすべて老にもよらず若きにもよらずいとも〳〵樂しきものは春の遊びなりけり

春の野ののどけき空にうかれつゝ
心いたらぬくまなかりけり

人

赤尾たま子

春の野のすみれつみにとかげに此頃の日かげののどかなるに霞ならぬこゝろも空にうきたちて野べのさまのみゆかしきに心しりの友ふたりみたりとふらひきていざたまへちかきあたりの野べりつはすみれ今さかりなりとて白妙の袖ふりはへてゆく人もさはなるにましで思ふどちうちむれゆかんは一としはならんとろゝのかされそゞろにうかれいでぬ里はづれにあまたのあげまきがいかのぼりあげをるさまもまづいとのどけしやいづらすみれさくあたりはなどいひつゝわけゆくに芝生の床をはなれつゝ空にあがるひばりのこゑかすみがくれの岡になくきゞすもいとあはれなり里のうなゐどものたもとにたまるばかりつみつゝそはわがものせしつむなるをといへばまたひとりかいなとよわれころはやかりしなどうちつぶやきあふもいとをかしかくてつむなまじりにかたみにたまるばかりつみたればまたこんひとのためにもとてさしおきぬげに一夜ねにけんみやびをのすさびもたゞなら

ずゆかしうなむ

宇多田楊子

今日は日曜にて殊に天氣もいとうらゝかにありければ兼て約せし二三の友とちと野邊に打出て見れば山の端にむら〳〵殘る去年の白雪もいつしか消え四方八方霞深くたなびき待ちに待たる櫻さへひもときそめて鶯は里馴かほに鳴き渡るなど聞くもの見るものいと長閑けき春の彌生の景色にぞありけるげにそのさま歌にも詠まゝほしく思へど余りに心の浮きたつまゝに詠めも得せず只かへさも知らずあなたこなたと遊びつゝありし折から早蕨の木の下陰にもえ出でぬるが見あたりければこはなによりの家つとにぞ有りけると打嬉びつゝ手打もたがへぬ其面白さに終日はくれていつしかおぼろ月夜の影うとくをたどりてやう〳〵家路さして歸りぬ

師岡須賀子

ある日空いとのどかにそよふく風も心地よければ前なる野べにて遊ばんと幼きものゝうながすに幸遊びの時間にもありければいざとて打つれてゆくこゝは芝はまに臨めるところにてもとは止事なき方さまの住ませ給ひし處なるが四年先つ方の三田の火の災に燒け失せて今は土藏三つばかり昔ながらにて守る人もなく心安きところなり友よびかはす水鳥の聲すみれの床はなるゝ雲雀の霞にきゆるなどめづらしきに波路しづかに打かすむ竹芝の浦あるかなきかの安房の遠山をちこちの海士のふねとりあつめて興あるけしきなりけりかしこゝに群れつどひて蒲公英土筆つみつゝ母子草つみぬ手にあまるまでとほこりがにもてくる女の童あり小山にのぼりて軍のまねびする男の童あり摘みつる艸とも詞じなどとり〴〵樂しく心ゆくすさびなりとかくするに小山の上なる童の聲して流車よ流車よ流車こそ來つれと云ふ打見れば品川の方より黑烟たてゝ近うなりたるなりけり幼き者の目にも耳にも珍らしう歸さ忘るゝまでなれど時うつりてはとて急がしたてつゝ歸さの路には出づれど心はなほかしこに止まりてなん

松田節枝

ぬるみし朝風にうしろ髮ふかせて心を野邊よたちいづおぼろ月夜の名ごりにや摩耶六甲のいたゞきかけてかすみの袖につゝまれたる姿やさしくゆげど〳〵もえいでし若草のみの道なれば波なき海にさまよへる心地せられていはんかたなきにまだ咲きやらぬ花うながせる鶯の歌浮世いとひて霞のおくにかくれて鳴ける雲雀の聲など今はた何にたゝふべしや去年の氷はとけにけん根芹洗ひてさらさらと苔に波うつ淸き流れの汀紫のゆかりの菫なかば殘りなる菜籠の見ゆるは誰がとりのこしゝにやたけぬ土筆は空に向ひて何をかくらむかれもこれもいとゆかし霞かくれに一つ二つ列をみだせる雁がねは昨年の秋越路に殘しゝ雛の笑顔を見んとてや急ぐらんさてもなつかしさまよひつ遊びつそてともしらず歩む程に夕暮の鐘かすかにひゞきぬ家路いづこと見渡せば八重のかすみは歸らん道を

鎖しぬあはれいづちをさして辿らん

佐々有鄰子

春雨の雲は霞と立かはる空ののどけさにまづ心なくうかれ出ぬ道のゆくての電信線に子もち燕のみつようつふたつ蛛でにも飛かふがすたおもしろくうちわたす野べのさいたつま目につく〳〵しつむなまじりのすみれ艸ゆかりもとめてつみはやす今日の遊にすがのねのながき日影のくれかゝることのをしまれてなん

大亦隆子

春の日の長閑さにそゞろ心のうきたちていざやむさしの原の野邊にや遊びなんと友垣みたりむかりと共よ立出ぬ

秩父甲州の山々も殘れる雪名ごりなく消失てけふはみどりの垣なと引まはしゝやうに野面の小麥大むぎなど千里も遠くあをむしろ志きたらんやうにひむりすゞめもいとこゝちよげになきさへづる樣景色いと〳〵めでたけれむやがて各草を志とねとし語りもし眺めもしつゝ遠く上毛の方を見渡せばかすかに見ゆる利根の帆舟木だちに見えつかくれつ白さぎなどのとびかふ如くをちこちのはたのべにはをとこめ子などの聲たかく笑ひのゝしりいとたのしげなるあるはたんぽゝつまんとてや小きかでなど携ふるわらはあるは川のほとりに魚うかゞふ男子供などひとつとしてたのしからぬものもなけれど各日頃のうさも忘れぬとぞよろこびぬるげにや四時のながめもいと多けれど春野の遊びはどたのしきものはあらずかし

植木鋼子

うら〳〵とかぎろひのもゆる春の野を思ふどち打つれてろことなくうかれありく程心ゆくはなしさわらび手折る賤の少女等がふしおもしろうひなうたうたふも耳めづらしく芝生にむれ遊ふうなゐが事有顔に友よびかはすは雲雀の床をや見出しけん日影に消ぬ雪をかしらにいたゞけども深山木の朽もはてぬさまみえて一人澤邊の水に根芹洗ふおうなあはれ清水の心あらゝ若葉志げりし昔の偲いま一度うつしてんと思ひやるなどかたりあひ打きようじてたどれる頃足もいとつかれしまゝかへさ路に赴きぬ

田村千代子

きゑのこれる雪かきわけて若菜をつみし朝よりあるはつく〳〵しにあるは菫にと春の野に出たゝぬ日とてはなきをけふはことさらに一人二人の友どちにさそはれて櫻見にものしつるが先づ木かげに蓙打志きてさけなどとうでたるに吹風ものどかなるをふたひらみひらおのづから花のさかづきに散りうかびたるもいとをかしかゝる長閑けき春の野をふりすてゝ大空高く立のぼれる雲雀をおもへむ世は皆こゝろ〳〵のものなりかし

淡海香女子

朝とくより百千鳥のうながせば今日は野べにと思ひ立ちぬ日はいとうら〳〵として近き山べは霞か花かわかねども青柳の風に靡くはたをやめの綠のかみをくしけづる如く田は菜の花れんげ花等のはころびんとするに麥のときまぜたるは志きものを

敷きたる樣なり少女等の袖ふりはへてあるはつばなをぬきあるは土筆を採る等げに君が代ののどけき春なりけりあまりの面白さに暮るゝも知らで居りしに鳥の歸を告けれど心をのみ野邊に殘して

足利世根子

昨日の雨なごりなう晴て彌生の空のいと長閑きに見ぬ世の人を友として獨りたれこめ居るも口惜しと親しき友ども二人三人かたらひてあわたゞしくわりごのまうけをなしそをかたみにたづさへてほど近き野邊へとたどりゆきぬ去年の野分に枯れしと見えし百草もいつしかに萌出でゝすみれたんぽゝ杯やさしき花咲きおのがむき〳〵色を染出す風情は蜀江のにしき布き連ねたる樣にて見るさへ心すが〳〵しくおぼえて我もとある花の木かげに坐を定めぬ實に春の野ほど見渡す限りのどけくをかしきはあらずあなたこなた群居つゝかたみに若菜摘む少女子或は嫁菜蓮華草など握み得ぬ迄にもちて喜ばしげなるおもゝちしつゝ遊べるさまいとたのしかよわき翅ひら〳〵と花を尋ぬる蝶のあとを影見えぬ迄追行く童子花のかげに一群の男女餘念もなげに目隱しの遊に見もしらぬ餘所の人をとらへてはなじろむもいとをかし何處の木陰にか鳥の音おぼろげに聞え雲雀は聲を殘して霞の内に入りそよ吹く風は青柳の糸にもつれて返に又ゆかしき花の香をたもとに送り來るもなつかしく實におもしろき春の野のながめなりや我も昔の少女にかへりて草花にうかれそこはかとなくさまよひて日めもす野邊をかりくらしけるに春の日もいつしか暮近く鳥どもの塒に歸るよ驚かされいかに父母のまちわびておはすらんにいざ歸りなんと打連て春の日を長きものとは斯る面白き遊をしらぬ人のかこち言にぞとかたらひつゝ家路さして歩みながら尙あきやらぬ心地せられて見歸る野邊は薄霞たちこめておぼろげに殘るは柳の糸に面白くかゝる夕月の影のみにこそ

上原とみ子

學びてし文のさらへもやう〳〵にしはてゝかうべもたぐるに日はうら〳〵とてりこみてなほ西の山には三たけ四たけもあめりをりしもあれ鶯の聲おもしろくこよ〳〵と開なさるいでや庭にもとていざりいづれば吹くともなき春風は寒からずてくさきの聲さへいや強く呼ぶにつれつゝ田の堤畑の畔などそこともなくまよひありくにかしこゝ青柳の糸うら〳〵と打招きたる心ありげなるに打ちもおかれずゆくほどよやがて山の裾野にぞいたりつきぬる芝生の千草老いかへりてしなやかに若菜の萌えいでたる鶯の茵にやと打座するにそこらむらなせる稚松は綠をそへ遠く雪と見し昨日の山は霞こめて墨染の衣をおほへりそがしたへにそこはかとなくきらめける水の面ののどけきなどはと〳〵つくりいでたらんやうなりかくてかの呼聲はこゝぞ〳〵とぞしきるなどげにねんなりやさて日の山の端ようすづくに驚きて家路をたどれど心さわやかに胸も何となうほがらかなるははた勉めて後の心からにやあらん

山手はな子

ある日親しき友どち打連て大の原の野邊に遊ばんと志しぬ空はいたくうちかすみてさだかには見えざるも雲雀の聲高く聞え英彦山の近く見ゆるこそまことに朗かなる空合なりけれかくて此處彼處を歩き大の原に到りぬ松の梢も今一志ほのみどりを添へ青柳の糸亂れ〱て烟にまがふ見るかひありて桃花は淡き濃き紅の色香を競ひ時を得顔に咲き初めげに心ある人に見せまほしう見ゆるはいとなまめかし亦よもの千草色つき賎の女が若茶つみつつ歌ふ聲もをかしかく詠めつゝ日頃のうさも忘れ日暮も去らで打興ずる折から入相の鐘に驚き殘り惜くも道を急ぎてぞ歸りける

平島りやう

日影うらゝかに照り渡りて四方の山邊にかゝれる雲は花かとうたがはれのどけさいはんかたなく人心おのづからうかれ出づる彌生の空なり今日こそは兼て思ひし野遊に出むやと友どち二人三人誘ひ午後一時頃より遠近とさまよひあるけば桃櫻などのいつしかにさきそめけん徐にはだへふく風もかをりあるこゝちす又雲雀の空高くなく聲の雲間もれくるもいとをかしうこそなん聞えけるかくて彼處の花の下にたはむれ此處の木の下にいこひなどして進み行間にいと廣やかなる野原に出たり此處には春草の萠え出たるがさながら毛氈を敷きつめたらんやうなりこれもをかしとて又いこひなどしけるに芹のあまたさかえたるが見ゆれば之をとらんとておの〱きそひてつみなどして日のくるゝ頃より漸く歸途につきぬ

佐藤みゆき

霞ならぬ心もうき立ちていとのどけき春のけしきに催されて文机かいやりあやしげなる破子にものして同胞打つれゆくりなく出でゆく見渡せば月の御山鳥の海の山など彼方此方に雪に肌をば深くおはひかすみの間よりはの見えてこと間ひ良なるも人のくるをおどろかれてかすみれの床を離るゝ雲雀の缺よりたつ心地して部にある身にさへいとをかしきを都の内にのみ住み給へる人々に見せばやなどうち興じつゝよめなたんばゝもち艸の弓手に妻手に咲き競ふ中をふみわけやゝ小高き處に登りて破子おし開けど飯はとふるはどの心づくしもなきぞたのしきややがてつみつる蓬つくしも缺にみちぬるを遠寺の鐘かすかにひゞき渡ればすがの根の永き春の日も今日は短き心地せられてなん

矢嶋婦爾子

昨日は今日の昔とか何時しか霞立ち初めて吹く風に言つてやり鶯誘ひつべき梅が枝のさまも思ひやらるされば何となく心浮き立ち落ち居て學ぶも覺束なくぞありける一日空晴れいとうらゝかなれば二三の友と語らひて雪間の若茶つみにとて出て行く遠くもあらぬ道なれば語らふまもなく郊外に出でぬ四方隈なくすみわたり拭へるがごとき空に友を尋ねてとぶ小鳥も二ッ三ッ四ッかすみこめて青みて出たるをちこちの山清き流の小川には青地の錦織れるかとうたがはれていとをかし雪消のひまよりも取いでたる若茶かれこれとりまぜてそかし

さは春の櫻と誰が手にもうきとりねましなどかたらふうちにわかなも籠にみちけれどいへづとにせんとかへりみれど日は山の端に傾きぬいざとどかりにつれ立ちてねぐらよかへる鳥と共に家路をさしてかへりけりこゝろへだてぬともどちづれなればなにかになくおもしろく青柳のいとながき日も紅葉なす頃よりは一きはみじかくおもはれてあかなくになどかこちけりされど古へ人の春のこゝろのどけからましといひけんもげにさなんとおもはる

懸賞課題　對花言志

天　長野縣長野町　小林米子

ながらへてまたこの春の花も見つ
　樂しきものはいのちなりけり

地　京都府愛宕郡上賀茂村　南大路象子

あだなりと人な思ひそ咲きにほふ
　花はみくにのひかりなりけり

人　大坂府西成郡今宮村　松田靜枝

われもまた朝日ににほふさくら花
　世に惜まれてちるよしもがな

忘れじや山邊のはなのえだぶにし　黒澤華子

よの上にしも立たぬつらさを　竹下きみ子

朝日影ににほふさくらのすがたさへ
　わすれざりせど人やめづらん　竹下すい子

ひともかくあらまほしけれ九重の
　雲によはへる八重ざくらばな　黒田まさ子

としじにかはらぬはなの香かな
　人のこゝろもかゝらましかど　伊藤やす子

うづもるゝ深山ざくらの花もなほ
　朝日ににほふいろはかはらじ　大亦隆子

いつしかは人にいろ香も傳へなん
　賤がのきどのわかざくらどな　内田慶子

あすはまたきてもめでたし櫻どな
　夜半のあらしにうつらふなゆめ　内田雪子

心あらどいらへなくともきけよ花
　なれ待ちわびしこゝろ盡しを　南大路素子

うつるべき色香忘れてあはれ世に
　床しくおもふやまざくらかな　南大路正子

かずならぬ身にも櫻のあふがれて
　獨りうれしき春にもあるかな

年ごとよ春のひかりとさくはなは　南大路芳枝
わが日の本のさくらなりけり

咲きにほふ花はむかしの花ながら　上松　菘子
みよのひかりに色まさりつ

いざ櫻さかむ咲かなんちらむちれ　上松　直子
常てふもの丶なき世なりけり

咲きにほふけふをさかりのやま櫻　平松賀壽子
われにも分けよ花のいろ香を

愛でこそむ怨もいはめいへむとて　雲井　花子
われをいとふな山ざくらばな

大方のいろかなりせむやまざくら　飯田　梅子
おもふことなく花を見ましを

なれ來つるわれをわするなやま櫻　瀧川きわ子
花はとしどし咲きかはるとも

物おもふたねとも知らでさくら花　瀧川　敬子
たがまきにけむ春のながめに

人ごころうつり行く世も山ざくら　田村千代子
はなはむかしの色に咲きけり

長閑なるいろ香を志むるこの花の　佐藤　敬子
心なりせぬうき世ならまし

花ちらす風もし訪はゞかざして　阿南　健子
いまださかじといひて歸さむ

咲きにほふ花の光りにもろひとの　勝家　貞子
こゝろの花もいろやそふらむ

盛りなる花にむかひて恥づるかな　松井たまみ
いつ世ににほふ我名なるらん

春ごとにかはらぬ花を見てぞ志る　河野みゑ子
むかしにもにぬ巳がすがたを

待ちわびし心も今日はあだざくら　平島りやう
あらしにちれる花となりにき

あだなりとなどかながめむやま櫻　寺尾たま子
日本ごゝろにかよふすがたを

こん年の春こそはなのいのちなれ　赤尾　愛子
仇なるいろをなにをしむべき

山ざくら見るにつけても思ふかな　妹尾ゆう子
やまとごゝろの花もかくやと

やま櫻さもうつくしくさきにけり　門田とめ子
折りて大君にさゝげんと思ふ

咲く花を見るにつけても思ふかな　わが身の春はいかにせしかと　森田とき子

春ごとに時をたがへず咲くはなの　こゝろを人にうつしてしがな　森田てる子

いつまでも庭の櫻のちらずあらば　木の下かげはたちもさらじを　坂本かつ子

櫻ばなにほふ木かげにかくしつゝ　よをへまほしと思ふけふかな　尾村さく子

年ごとにいや咲きにほふ花の香に　おとらではげめやまと國びと　佐藤みゆき

外國にたぐひもなきは日のもとの　やまとごゝろと花となりけり　師岡千代子

世の中にちるををしまぬ人やある　おもへばつらし山ざくらばな　廣岡とよ子

形こそことほくおよばねやまざくら　さすがこゝろの花はおとらじ　小國　常子

手をこめてそだてしにはの櫻ばな　ふるじをよそに移ろひぬとは　佐藤　秋子

手折らんととつくに人は競ふなり　こゝろして咲けやまざくら花　足利世根子

八重にほふみねの櫻のたぐひなき　はなのこゝろを我になしてむ　押尾　菊子

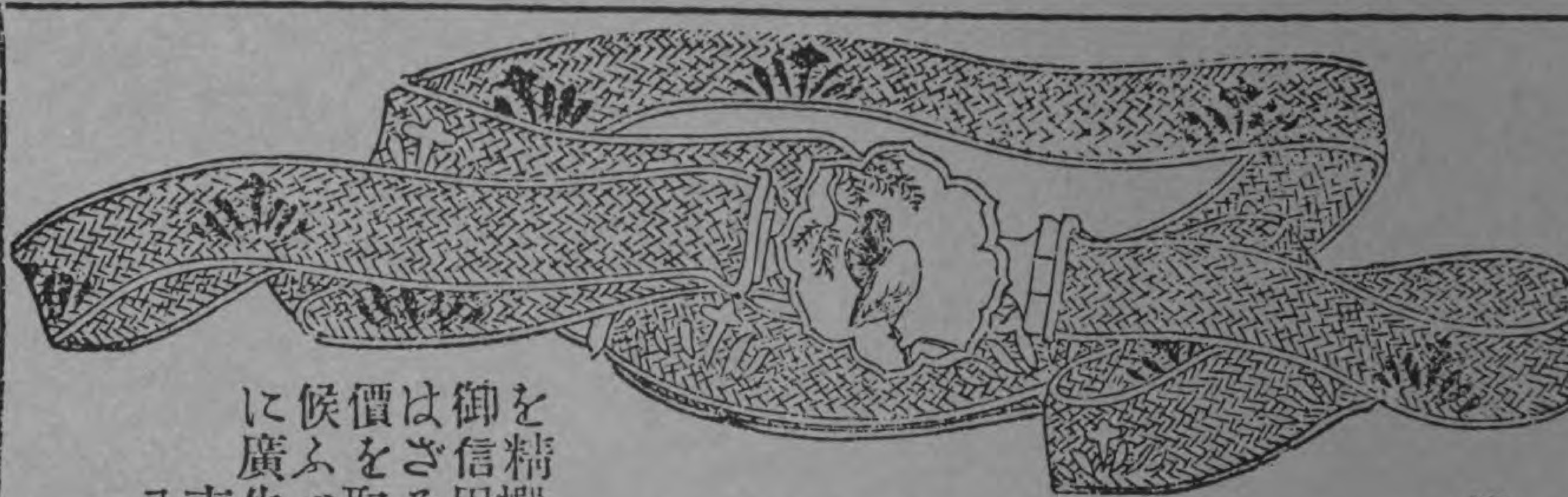
花のごと匂はぬとても千代かけて　かはらぬ松のみどりともがな　高橋たか子

色はたゞ夜にふる雨にうつるとも　にほひ計りはとゞめてしがな　小澤眞佐子

兼題

四月廿日
- 歌　野雲雀
- 文　山吹の花を贈る詞

五月五日
- 歌　卯花
- 文　學校の事を記す



御婦人用御帶止

金又はフラチナに草木花實鳥獸虫魚古代摸樣等の形容を彫刻し或は種々の寶石寶玉を裝飾したるもの

甲價金四拾圓〇乙三拾五圓〇丙三拾圓〇丁廿五圓〇戊二拾圓〇己拾五圓〇庚拾圓〇辛八圓

右の金ものは何れも名工の手に成り紐は織物或は種々の新形又は古代の組方に做ひたる絹打にて其製作都て壯麗にして纍美なり尤も彫刻の疎密わるひは寶石の大小に依りて代價にも高下われむ冀くは車を柱て弊堂に臨み其現品を御覽じ玉へ但し遠隔の地ならむ郵便にて御注文を下し玉へ代金御送附次第その價に相當の品を精撰して調進し參らせ聊かにても御信用に負く事は候はず若思召に叶はざる時は他品と交換し玉ふとも原價を取戻させ玉ふとも御望の隨意に候ふべて其手續ともは屢々各新聞紙に廣告したる弊堂店則に詳らかなり

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

●電話三百三十三番

天賞堂



純金平打（槌目）又ハ（無地）（廿五年十一月十五日調）

金位	目方四匁付	三匁付	二匁付
純金	十六圓八十錢	十二圓八十五錢	八圓九十錢
廿二金	十五圓七十八錢	十二圓十三錢五厘	八圓四十九錢
廿金	十四圓五十一錢二厘	十一圓十八錢四厘	七圓八十五錢六厘
十八金	十三圓廿五錢六厘	十圓廿四錢二厘	七圓廿二錢八厘
十六金	十一圓九十八錢	九圓廿八錢五厘	六圓五十九錢
十四金	十圓七十二錢八厘	八圓三十四錢六厘	五圓九十六錢四厘
十二金	九圓四十七錢二厘	七圓四十錢四厘	五圓三十三錢六厘

認印付は前記の外一圓增し篆刻料は一字一圓此の外金若くは白金地へ寶石寶玉を裝飾したる物又は種々の彫刻を施したるもの許多有之候間御來車の上現品御一覽下さるか郵便御注文なれむ寶石入若しくは彫刻附等の區別を指示し代金御送付あれむ其價に相當の品を精撰して調進すべし若し貴意に適はざる時は購求當日より一周間（本店商品中時計に限り三十日）以內は（府外は相當の往復日數を加ふべし）凡そ其物品に破損毀傷なきに於ては何時にても需に應じて他の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かたりとも其爲に手數料若くは割引等を加へざるべし其他の手續は屢々各新聞紙に廣告する所の幣弊堂店則に詳かなり

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

●電話番號三百卅三

天賞堂

女鑑第三十五號目次

(遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麹町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑　毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿六年四月四日印刷
同年同月五日出版

發行兼印刷人　東京麹町區平川町六丁目十二番地　川崎直衞
編輯人　同　東京麹町區平川町五丁目十六番地　山根勇藏
發行所　國光社

國光社印刷部印行